
失われる世界～ロストパレット～

明兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失われる世界〜ロストパレット〜

【Nコード】

N7559X

【作者名】

明兔

【あらすじ】

他サイトでも連載していました

突然現れた男に主人公、桜木疾那は世界を救うように頼まれる。

理由もなく、善意もなく疾那はそれを受ける。

表世界、平行世界、裏世界。そして——の世界。

いくつもの世界が絡まりあって物語を作る。

疾那は世界を巡り何を見つけるのだろうか。

そして、何を手に入れるのだろうか

疾那の旅が今始まる

プロローグ 1

「つまらないな」

少年、桜木疾那はそう呟いた。

その足元には、数人の服を着崩した不良と見られる生徒が倒れていた。

「感心皆無」と四字熟語を貼り付けられている疾那は自分から何一つ危害を加えたりはしない。

勝手に同士討ちした、それぐらいにしか目の前の事態を捉えていなかった。

常になんの目的もなく、ただ感情のままに行動していた。

だからこそそのつまらないという発言。

本心と言うより本能。

ただ思ったことを口にしたに過ぎなかった。

「さて、帰るか」

疾那は帰路についた。

疾那の朝は早い。

母親を早くに亡くして、父親もほとんど家にいないからご飯を作るためだ。

朝食も昼の弁当も妹の桜木^{さくらぎ}木香^{もか}の分まで作るため、自然と朝は6時に起きることになる。

だが疾那はそれを苦に思ったことはなかった。
だからと言って楽しんでいるわけでもない。

ただなにも感じなかった。

それが当たり前なのだから何を気にする、といった具合だ。

「木香、ご飯だぞ。起きろ」

呼ぶが返事はない。

いつも通りの寝坊だ、別段気にすることでもない。
階段を登り二階の木香の部屋に入る。

この距離で呼んだとしても木香は起きない。
やることは決まっている。

「早く起きろ」

掛け布団を思い切り剥ぎ取る。

簡単な行為だが、一番効果的な行為だ。

それで投げ所を無くした木香は目をさました。

「おっはよー、お兄ちゃん」

寝起きとは思えない屈託のないにこやかな笑顔で木香が言った。
疾那はそれに対して「おお」と無愛想に答えるだけだった。
木香は呆れたように、言葉を口にした。

「まったく相変わらずの無愛想だね。妹として私は悲しいよ」

「そうか、それは残念だったな。早く朝御飯食べるぞ」

「もー、少しは反省してよ！」

と言葉は怒りつつも、表情は笑顔のままだった。

結局木香は疾那のことが好きだ。

それはもちろん兄妹としてであって、それ以上ではない。

「おっ、朝から美味しそうなご飯だねえ」

「どうも、いただきます」

「いただきますーす！」

と言いながら言葉より早くつまみ食いしていたが、疾那は指摘しない。

疾那は注意したところで木香が治さないのは長い付き合いでわかっていた。

口に入れるスピードは早いが、表情はとても上手そうに食べていた。

それだけで美味しそうに食べていることがわかる。

もはや説明も要らないが、疾那は無表情だった。

「じゃあ私は準備して行くね！」

「ああ、気を付けろよ」

と言いつつ疾那は先に家を出るのだった。

学校につくとやかましい声で迎えられる。

疾那はそれを嫌ともいいとも思わない。

ただ無感情で通りすぎる。

「よつ、疾那！ 相変わらずやる気ない面してんな！」

「誰かと思えば始乃斗か。おはよう」

疾那とは真反対のテンションで学校を闊歩しているのは、阿原始乃斗だった。

クラスのムードメーカーであり、学校一の問題児でもある始乃斗と何故か疾那は仲が良かった。

まあそれも始乃斗が一方的に話続けているだけなのだが、誰かが困るわけでもないため、誰もなにも言わなかった。

「まったく、お前と話していると一人言ずっと言ってる見たいで嫌になるぜ」

「悪い、気を付ける」

「それ今週でもう18回目だよ！ で、改善された回数は0だ！」

「本当に申し訳ないと思ってる」

「はいはい、じゃあ飛びきりの笑顔をくれよ」

「こんなのでいいか？」

そう言って、疾那は口の両端を指で吊り上げて、仮面のような笑顔を作った。

それを見て始乃斗は諦めたように笑った。

二人が所属している3年2組へと向かった。

その途中始乃斗は視界の端に嫌なものを見つけた。

「やべ……。疾那、早く教室に」

「ちょっと人助けしてくる」

「手遅れだったか……。はいはい、ここで待っててやるから早く済ませてこいよ」

「ああ、ありがとう」

そう言って疾那は『不良に絡まれている女子生徒』の元へと向かった。

「離してください!」

「お前がぶつかってきたんだろうが!」

「そうだそうだ! 謝れ謝れ!」

「当たったのがどつちかなんてわからないじゃないですが! そんな下らないことでこんなことするなんて馬鹿馬鹿しいですよ!」

「誰が馬鹿だ! 舐めやがって……。オラア!」

そう言っつて不良の一人が女生徒に拳を振り上げた。

女生徒が小さい悲鳴をあげたのが廊下を歩いていた生徒の耳に届いた。

だが不良の拳が女生徒に当たった音はしなかった。
代わりに、『疾那の背中に拳が当たる音』が鈍く鳴った。

疾那は小声で女生徒に逃げるように言って、自分の体に当たっている拳を握った。

そしてそのまま、脅迫を口にした。

「逃げるなら許すが、このままここにいたら正当防衛を発動させてもらう」

静かに不良を睨み付けた。

不良は少し物怖じしたが、すぐに威圧的な態度を戻した。
そして足で蹴りを打った。

鈍く疾那の足に当たったが、疾那はまるで痛みを感じさせなかった。
いや、実際に痛みを感じていなかった。

「ああ、折角チャンスをやったのにわざわざ見逃すか」

「て、テメエ何様のつもりだあああ！」

「あつ、先生こつちです」

「おい、お前ら何をしている！」

「やべつ、教師が来やがった！ 逃げるぞ！」

と言って二人は疾那と教師の真似をした始乃斗から逃げ出した。
始乃斗はしてやった、みたいな笑顔で笑っていたが疾那は無表情のまま変えない。

「なんだかんだ言っ て協力してやる俺もお人好しだよなあ」

「じゃあ俺はなんなんだよ」

「人でなし」

「酷い言われようだな、俺」

と皮肉を言いつつ疾那は笑っていなかった。

放課後、疾那は教室で荷物の準備をしていた。

テスト期間が近いから、教科書とノートを鞆に詰め込んでいた。

他のクラスメイトは部活やらなんやらで教室にはいなかった。

季節は10月で部活も三年が引退し、新チームで活動を始めている。

それを横目で流しながら帰宅部である疾那は帰路へ向かった。

しかし

「やあ疾那くん。会いたかったですよ」

それは黒で全身を着飾った男によって阻止された。

疾那は身構えず、驚きを隠した。

しかし、あの無感情で無関心な疾那が驚いたのは確かだった。

「誰だお前は？ と言っておくのがいいか？」

「僕の名前はアート。世界の案内人とでも思ってください」

「世界の？ 胡散臭い人間だな」

「単刀直入に言います。あなたに世界を救ってほしいのです」

疾那はその言葉に首をかしげた。

世界を救うなんて突拍子もない話を言われてもただ困るだけだ。
理由を説明するよりも早くアートは口を開いた。

プロローグ 2

「この世界は狙われています。それよりも先に……貴方は魔法や超能力の類を信じていますか？」

「信じてないな。そんなものが存在している証拠はあっても根拠がない」

疾那は魔法や超能力、もつと言えは霊やUMAなども信じていなかった。

理由は今、本人が言った通り、根拠がないからだ。

そう言うものがあるのは、わかるがそれはただの偶然に過ぎず、そうでなければトリックでしかない。

どちらにせよ、存在する証拠は残らない。

「貴方が信じていようがいまいが、それは事実なのです。例えば、僕が今こうして人払いの魔法を使っていることかは根拠になりませんか？」

そうして疾那はやつと気づいた。

今明らかにおかしいことが起こっている。

何故、誰一人生徒がいないのか、その異質さに気がついた。

部活で新チームが忙しいかもしれない。

だからと言って教室や廊下までこの階層に誰一人いないのはおかしい。

「異質……だけど根拠にはなり得ないな」

「これを根拠と見ていただけないのなら、根拠を見せることは不

可能でしょうね」

そう言ってアートはクスクスと笑った。

それを見て疾那は静かに鞆の中に入っているあるものに手を伸ばした。

「だからと言って、僕に剣技を使うのは違うと思いますよ」

これも超能力の一部だろうか。

しようと思っていたことを見抜かれて、俺は大人しく定規を手から離れた。

疾那は幼少時から剣技を習っていた。

それは家が道場だったのが理由だ。

疾那はかなりのセンスがあり、中学に上がる頃には道場にいる誰よりも強くなっていた。

「まあ、信じなければ話が進まないんだろうからとりあえずは信じるよ」

言葉はしかたなしと言った感じだが、疾那は超能力を信じ始めていた。

目の前で人払いをしているのを確認し思考を読まれた。

それにより、疾那の目の前に気配も音もなく近づいてきたのが最たる理由だ。

「わかっていただけで幸いです」

俺の思考を見透かしたようにアートは笑った。

「で、この世界に何が起こってるって言うんだ？」

「世界は大きく3つに分けられます。まず今僕たちがいる表世界。この世界はいたって普通の世界です」

「へえ」

「そして次が平行異世界。この世界と等しく、平行に違う時間を進む世界です」

「ほう」

「最後が裏世界。表世界と平行異世界とは真逆に位置する世界です。その世界で起こることは、〃で表世界にも影響が及びます。つまり裏世界で地震が起これば、表世界でも地震が起きるわけです」

「うん、それで」

「なんか貴方相手に話していると一人言をいつている気分になりますね」

苦笑いでアートは言った。疾那は笑わなかった。

これ以上は何を言っても無駄と思つたのかアートは話を続ける。

「その裏世界を壊そうとたくらんでいるやつらがいるのです」

「つまり表世界も壊そうとしているわけだ」

「飲み込みが早くて助かります。じゃあそれを止めるために何をすればいいか、そのひとつ目は平行異世界にいる彩人あやひとと協力して、

裏世界を守ればいいのです」

「質問する。彩人つてのはなんだ？」

「各平行世界に存在するあなたの人格の一部を引き継いだ存在とでもお思ってください。貴方であり貴方ではない、そういう適当な解釈で構いません。僕でさえわからないんですから」

アートはくすくすと笑う。

それに疾那は無愛想に返事をした。

疾那は話を聞いただけである程度事情を把握していた。特別な感情をいだかない分理解が早いのだろう。

「そしてもう一つは世界を壊そうとする罪人たちをカラーの力を使い封印することです」

「罪人とカラーについて説明を頼む」

「罪人は名の通り、七つの大罪に対応する七つの世界に存在する七人の能力者を指します」

ちなみにさつき説明した彩人も能力を持っていますよ、と続けた。能力という単語に疾那は眉を潜めるが、すぐにその感情を押し殺した。

「カラーとは……貴方の人格のことを指します」

「待て、俺の人格だと？ それはどういう意味だ」

「その言葉通りです。貴方は感情と欲が欠落しています。生まれ

る前に貴方の人格は散らばり、平行異世界を作りました」

「待てよ……意味がわからない。なんだよ、それじゃあ俺が原因で世界が破壊されるって言うのかよ」

「まあ極端に言っとそうですね」

当たり前のことを言うように、アートは答える。

思考を切り替えるために疾那は、顎に手を当て状況整理を始めた。それでもなかなか情報はまとまらない。

すべての発端が自分ということが、思考を邪魔している。

だが冷静に考えれば納得がいった。

今まで無感情で無気力で無関心だった自分はそれが理由だと考えれば理解ができる。

そうか、俺はだから今まで……。

「以上のことを貴方にはしていただきます。拒否権はありません」

「理解はしてないが、断る理由はないな。わかったお前に協力してやる」

「ありがとうございます」

被っていた帽子を取り深々と頭を下げたアート。

疾那は困ったような素振りは見せずに、ただ目的を整理していった。

「一応聞いておくが俺にも能力のようなものはあるのか？それがあれば一番信用できる」

アートは、まだ能力について疑っていたのかと静かに笑う。

「ありますよ、ストライクフレイド疾風刃来という能力がね」

「凄いセンスだな」

「……お気に召さなかったのなら変えていただいて結構ですよ」

「別に問題はない」

「そうですか。能力は取り込んだカラーに応じた能力を使用することが出来る能力です。例えば赤のカラーを取り込んだのなら、力を増幅させるなどですね」

「なんとなくはわかった。今それを証明する術はないんだろ？」

「いえいえ、桜木疾那という人格に対応する能力がありますよ。宙に『空』と書いてみてください」

言われた通りに疾那は宙に『空』と書いた。

すると文字を中心に光が発生し、そこからある物体が出現した。

それは疾那が愛用している、逆刃刀だった。

なれた握り心地に安心感を覚える疾那。

「その状態でもう一度同じ文字を書いてみてください。シグナルパレット色彩反応が発動します」

もう一度言われた通りに宙に『空』の文字を書いた。

すると逆刃刀に風の膜が張り付いた。

指先でそれをなぞると、切り傷が作られる。

つまり切れ味を付加したわけだ。

「これで大体のことは理解いただけましたよね？ では早速他の世界に行ってもらいましょうか」

「はあ？ もういくのか。まあ、いいか」

大人しく俺は住み慣れた世界を旅立った。

赤の世界一話 「開始」

疾那が目を覚ますとそこは木造の建物の中だった。

自分がベットの上で横になっていることに気づくととりあえず起き上がる。

「ここは……どの平行異世界だ？」

疾那がそう思考すると同時に頭にズキリと痛みが走った。

そしてその痛みが何かを思い出したことによる痛みだと気づくのに大した時間はかからなかった。

思い出したのは、この世界の名前。

「そうか、ここは赤の世界か。七つの大罪の暴力に当てられる世界……か」

この世界にも疾那の人格の一部がいるからこそ起こった現象だった。

ちなみにこのとき既に疾那は超常現象を完全に信じていた。

猜疑心も疑心もない疾那には目の前の出来事を現実としかとらえられなかったからだ。

疾那は自分に何が起こっているのかを考えた。

自分が、『偶然ここについたのか』、それとも『どこかに倒れていたのを誰かがここに連れてきたのか』。

後者だった場合それが善意なのか悪意なのかで疾那の運命も変わってくる。

少しの期待を込めドアノブに手をかける。

それを回すとあっさりとドアが開いた。
それで疾那は何者かの善意によってここにいることを理解する。

「怪しい……けど行くしかないよな」

どうせこの世界に俺の場所なんてない、と不感症のまま部屋を出た。

部屋を出てもそこにはただ廊下が続くだけで何もなかった。
精々レイアウトに壺や絵が数枚あるだけだ。

そのまま廊下を歩き、外へと向かう疾那。
外の空気を吸うと受け入れられているのか、拒絶されているのかわからないなんとも言えない心境になる。

「まずはどっちから探すか……。確かカラーってのはペンダントを触らないと取り込めないんだよな」

と、自分に問いかけるとどこからか答が返ってきた。
その答えはイエス、疾那はとりあえず気の向いた方向へ向かうことにした。

ペンダントの在処は本能的にわかるようで、何かを目指して疾那は歩いた。

そして三回目の角を左折したときだった。

「手を挙げて頭の後ろで組んで、膝からしゃがみなさい。でなければ攻撃するわ」

背中に鈍い何かを押し付けられた疾那。
大人しく従うか考えた結果、死にたくはないからとしゃがんだ。

端から見れば異様な構図だった。

制服姿の高校生男子が、同じく制服を着た女子高生にトンファーを押し付けられながら膝をついている。
しかし疾那の顔に恐怖の色はなかった。

「何が目的だ？ 金目の物は何一つ持ち合わせてない」

「そんなのじゃないわよ、家の近くに不審者が彷徨いてたから拘束しただけ」

そう言っただけで赤髪の少女は指パッチンを鳴らした。

「だけどよく見たら私がさっき保護してあげた人だったのよね」

「ああ、お前が俺を助けてくれたのか。ありがとう、例を言う」

「感謝されるほどのことはしてないわよ」

赤髪の少女は頼もしい笑みを浮かべた。

拘束を解除され、疾那が少女の方を向き直すとそこには美少女が立っていた。

しかしその可愛さの中にも凜としたかつこよさもあった。

しかしそんな雰囲気にも疾那の心は動かない。

不感症で無感情な疾那に色欲なんてあるはずもなかった。

「まずは自己紹介よね。私は神楽坂雛奈^{かぐらざか ひな}」

「俺は桜木疾那だ。よろしく」

二人は手をだし握手を交わした。

「まあお礼をしてくれるって言うなら、ちょっとお願いがあるんだけどいいかしら？」

「ああ、わかった。で、何をすればいいんだ？」

「ちょっと薪を切ってほしいの」

「薪？　なんだ家を燃やすのか？」

「普通に暖を取るって言えなかったのかしら。しかも冗談ってわからないから真顔で言わないで欲しいわ……」

「違ったのか。まあいいじゃあ薪を持ってきてくれ」

と言うのと同時に疾那は宙に「空」と書いた。

すると宙に木刀が出現する。

それを持ちながらもう一度同じ字を書き、風をまとわせた。

雛奈はそれを見て、目が点になっていた。

「桜木くん……もしかして能力者なの？」

「ああ、そうだ。俺は能力を持っている」

疾那が隠さずに告白したのは、雛奈も能力について知っていると思っただからだ。

知っているなら雛奈は彩人か、それともアートのような存在か、もしくは罪人かのどれかになる。

彩人であるのが一番都合がいいのだが……。

逆に罪人であるのが一番都合が悪い。

「で、雛奈は彩人か罪人どっちだ？」

「私は彩人よ。証拠はないけど信じてもらえるかしら？」

「否定する理由がない。信用しよう」

「ありがとう」

そう言って雛奈は指パッチンを鳴らした。

その笑顔はとても可愛らしいものだったが、疾那が反応するはずもなかった。

「まあ信用する材料として、能力を見せてもらっていいか？　まあ、しょせん確認程度だ、嫌ならしなくてもいい」

「いや見せるわ。私の能力は炎霊^{フェアリーテイル}。炎を操る能力よ」

と言って、指を突きだしその先から炎を出した。

「その能力名は自分で考えたのか？」

疾那の言葉を聞いた雛奈は頬を赤く染めた。
そしてぶんぶんと腕を振り、否定を表現した。

「そ、そ、そ、そんなわけないじゃない！」

「なんで頬を赤くしてるんだ？　にしても炎を操る能力か、俺のとは違って大分便利そうだな」

「桜木くんの能力はさっきの木刀を出す能力？」

「まあ半分は正解だ」

疾那は雛奈に自分の能力を説明した。

反応は微妙な感じで、可もなく不可もなくといった様子だ。ついでに疾那は自分が今しようとしていることを説明した。やはり同じように雛奈の反応はなんとも言えない感じだ。

「と言うわけで改めて質問だ。一つ、俺に着いてきてくれるか。もう一つ、カラーについてなにか情報はないか」

疾那は薪を切りながら雛奈に質問を投げ掛けた。

カラーについては知っていればラッキー程度に疾那は思っている。雛奈は顎に手をあて情報を整理していた。

何を伝えるべきか、何を説明しないべきか、取捨選択をしている。

「そのカラーってのはペンダントの形をしてるのよね？」

「らしいな。俺自身まだみたことないからはっきりしたことは言えないが」

「だとしたら見たことあるわ。私の幼馴染が持っているはずよ」

「それは本当か？」

嘘をつくわけじゃないじゃない、と雛奈は笑顔で答えた。それを疾那は薪を割りながら首を縦に振り肯定を示す。

「無愛想な反応ね。お姉さんつまらないわ」

「そうか、それは悪かった」

「そう言つとこが悪いのよ!」

「すまない」

「だからっ! もー! 本当調子狂うわね!」

半切れ気味の雛奈に疾那は不思議そうに首をかしげるだけだった。

「まあ、良いわ。あなたの旅に付き合うのは構わない。ただしひとつ条件があるわ」

「聞けるものなら聞こう」

「さっき言っていた幼馴染に起こってる問題を解決してほしいの」

「問題?」

「そうよ、ちょうどペンダントを手に入れたくらいからかしら、その頃からあの子の性格が暴力的になったの。それと私みたいな能力も持っていて……」

「そのぐらいなら構わない。是非ともお前に協力しよう」

「ありがとう。じゃあさっそく問題解決に行きましょうか」

雛奈は相変わらずの俺とは対極的な笑顔でそう言った。

「いや、待て。行くのはもうちょっとしてからにしよう」

「なんでかしら？」

「薪を……全部切ってからにしよう」

「……好きにきなさい」

呆れ顔で雛奈は俯いていた。

赤の世界二話 「進展」

赤の世界のどこか、その廃墟でヴィンセントと呼ばれる少女は暗躍していた。

首にペンダントをしたヴィンセントは、目が赤に染まっており、暴力的なオーラをまとっている。

廃墟には少女以外にも四人の男がいて、その内三人は左目のみが赤く染まっていた。

「ねえ、ファルク」

「なんだ、^{あき}赤季」

「ヴィンセントと呼びなさいといってるでしょー!」

「……で、ヴィンセント何か用か?」

「そろそろ雛奈が来そうな気がするの。これもこのペンダントの影響ですかね?」

「なら……私も準備をしておくか」

「私の部下も……この三人なら充分に満足できますよね」

と言いながら、ヴィンセントは三人の方を横目で見た。

そして手招きをすると犬のように、ヴィンセントの元によってくる手のひらを差し出すと反射のように手をのせた。

「ファルク、剣の腕はなまってないですね?」

「希望なら一瞬でお前の首をかつ切ることも可能だが？」

「そこまで言うのなら、私の圧倒支配デシプテーションで貴方を支配してもいいのですよ？」

「お前の起動条件に私が引つ掛かるとでも？」

「……冗談ですよ」

ヴィンセントのペンダントの効果により手に入れた能力は雛奈の能力のように万能ではなく、発動条件も発動対象に条件もあった。しかもそれはファルクには知られているため、ヴィンセントがファルクに能力を使うことは出来なかった。

「じゃあ行きましょうか」

「そうだな。あの場所に行くか」

「じゃあ貴方たちも来なさい」

そして五人は、廃墟を出て行った。

「よし、これで終わりか」

疾那はすべての薪を切り終わると、木刀を消してそう言った。雛奈は壁にかけて寝息をたてている。

何しろ雛奈が話を切り出してから一時間経過しているのだ。

「おい、雛奈。起きろよ」

疾那は雛奈の両肩を揺らした。
うーん、と小さくうめきながら雛奈は目を覚ます。

「あと五分お願い…」

「俺の妹じゃないんだから、早く起きろよ」

「あぐっ」

疾那は雛奈にデコピンをして強制的に意識を戻した。
短い悲鳴をあげながら起きた雛奈は外の明るさを見て時間帯を推測する。

そして自分がだれを垂らして寝ていたことに気がつくといきなり口元を拭いた。

「み、見た？」

「何をだ」

「わ、わからないならいいのよっ」

赤くなつて否定する雛奈を真顔でみている疾那と言つ絵は物凄くシニールだった。

もともとシニールだからと言つて誰かが突っ込むわけでもないのだが。

「じゃあ、そろそろ行きましょっか」

「ああ、そうだな」

と、二人が歩き出した直後だった。

二人の背後に迫る、男の影。

白衣を着て右手にメスを、左手に注射器を持つ姿は異質、いや異常だった。

そしてその異常が狂気を振るった。

ギリギリで気づいた疾那は珍しく防衛の感情をさらし、雛奈を押し飛ばした。

「危ない、雛奈！」

狙われていた雛奈を押し退け、庇った結果疾那の横腹辺りに切り傷がつけられていた。

だが苦痛に表情をゆがめる様子はない。

むしろ、飛ばされた雛奈の方が痛みを感じているくらいだった。

自分の横腹についた傷を指先でなぞり、血をふき取る。

その後疾那は宙に「空」の文字を書き木刀を手についた。

「疾那、あいつ私の幼馴染の近くにいた人間だわ。だから……」

「わかってる」

「そうよね、よかったわ」

「死なない程度に懲らしめろだろ？」

「違うわよっ！？ 気絶させる程度でいいのよ」

「なんだ違うのか。わかった、気絶させる程度だな」

木刀を構え、白衣の男と対峙する疾那。

白衣の男は不気味に、異常に笑う。

疾那は相変わらずの無表情だった。

そして二つの力が同時に動きだす。

白衣の男はポケットから取り出した、薬品のようなものが入ったフラスコを投げ捨て、疾那はまっすぐに走り出す。

投げつけられたフラスコを割らないように丁寧に木刀の柄でいなす疾那。

それに驚いた様子もなく白衣の男は更に四本のフラスコは投げた。

「面倒だな……。こんなときに奥義でも技でも使えたらだいぶん楽しんだらうが」

と、文句を言いながらも疾那は四本すべてを器用にいなした。

それで初めて白衣の男は初めて動揺の色を表情に出す。

おそらくこのフラスコのうち一つでも疾那に効果を及ぼすと思っていたのだろう。

その当てが外れた精神的余裕の欠落は酷いアドバンテージの差になる。

「もう、終わりか？」

疾那は特に意味もなく単純な意味としてその言葉を口にした。

それに白衣の男は更に一步引き、逃げ腰を取る。

「じゃあ、これで終わりだ」

一瞬。

疾那と白衣の男の間にあった、10メートルほどの距離はほぼ一瞬で詰められていた。

そして木刀での顎への打撃。

脳を揺さぶることを目的としたその攻撃はクリーンヒットし、気絶させることに成功した。

「終わり、か」

その後疾那は木刀を消して、体にわずかについた砂埃を手で払った。

「桜木くん意外と強いよね」

「疾那でいい。まあ、剣技でなら簡単に負けない自信があるからな」

と言いつつも少し腕が鈍っていたことを少し気にする疾那。と言ってもそれは他人は気づかない程度の誤差のような違いではないのだが。

「にしても、こいつどうしようかしらね」

「お前の知り合いなんだろう？ だったら一つ聞きたいことがある。こいつはいつつもこんなことをするような人間だったのか？」

「私の知り合いじゃなくて、私の幼馴染の知り合い！ そうね、元々はただの研究好きの人だった。けど、間違っても自分から望んで人を襲うような人間じゃなかったわ」

「やっぱりな……。おかしいと思ったんだ、こいつは様子がおかかった。人を襲う以外に目的がない目をしていたんだ」

「というと？」

「恐らく、こいつは誰かに洗脳されていた」

「洗脳……？」

疾那の言葉に雛奈は怪訝そうに眉を吊り上げた。
いきなり洗脳なんてぶっそうなことを言い出したのだから、そんなものもある意味自然な反応だ。

しかし雛奈には心当たりもあつた。

ここ数か月のヴィンセントの行動には明らかな違和感があり、その周りの人間にもおかしいことが起こっていた。

昔からヴィンセントのおっかけのようなものはいたのだが、それがここ数か月は異常と言えるようになっていたのだ。
それが洗脳が原因とするならば色々と納得がいく。

「でも、赤季は彩人じゃないのよ？ もちろん罪人でもないし」

「一つだけそれ以外でも能力を持つ例がある。カラーに魅入られた場合だ。そうなるとカラーから能力をもらうことになる。そして、性格にも変化が現れる」

「……………なるほどね」

その言葉で雛奈の中でもややもやとしていた疑問は解決した。

それと同時に一つの解答も出てきた。

「わかったわ。それはカラーを引き剥がせば助けられることができるのよね？」

「正確には俺がカラーを取り込むことで、だがまあおおよそはあってるな」

「そう……。じゃあ、助けに行きましょう」

「ああ、わかった」

雛奈の後を疾那は黙ってついていった。

疾那は背中越しで感じる雛奈の表情に憤りの色を感じていた。

それは誰に対してなのか、何に対してなのかは知りえないのだが。

二人の幼馴染の最後の喧嘩が始まろうとしていた。

赤の世界三話 「突入」

疾那が雛奈につれて来てもらった場所は森だった。

辺りは木ばかりでまさに森といった感じ。

なにもないわけでは森であるため絶対にはないが、それでもある意味同じ景色ばかりで飽きそうだった。

視覚情報のゲシュタルト崩壊とでもいうのだろうか。

秘密基地と言われついてきたがそれらしきものはまったく見あたらなかった。

根も葉もあるが姿がまるで見えない。

「おかしいわね……。昔は確かにここにあったのに」

雛奈の目論見ではこの辺にあると思っていたのだろう。

しかしその予想は外れた。

じゃあ秘密基地はどこにあると言っただろうか。
それを疾那は疑問として口に出す。

「秘密基地は見当たらないのか？」

「う、うるさいわねっ。すぐに見つかるわよ！」

「意地を張るなよ。……だがこの近くにカラーの気配を感じるな」

「カラーの気配……？」

「ああ。カラーは一応俺の一部だからな、なんとなくの気配はわかるんだ」

疾那は気配に神経を澄ました。

すると段々と位置情報が鮮明になっていき、特定が進んでいく。そして場所が確定した。

「やっぱりこの辺みたいだ。しかもそう遠くない」

「ほら、やっぱり私があつてたじゃないの！」

ふふん、とドヤ顔で笑う雛奈。

それを疾那は意外にもスルー。

流石無感情の疾那である。

「でもそれにしてはまったく見えないわね。疾那のそれは本当に合ってるの？」

「俺が方向音痴とでも言いたいのか。自分の居場所がわからないわけがないだろ」

「そ、そうだけどっ！ そんなにきつく言わなくていいじゃない！」

「別にそんなきつく言つたつもりはないんだが」

疾那との会話がすれ違うのは当たり前のこと。それが今日初めて会った二人でなら当たり前だ。

「……うん、私の考えすぎだったわ。これから一緒にいるんだから仲良くしましょう」

しかしそんなすれ違いを受け居られるのが雛奈だった。

姉御肌でリーダー気質な雛奈は誰よりも人を受け入れる才能に長け、人を認めることが出来る人間だ。

そんな彼女が疾那と一番最初に会った彩人で幸運と言えた。

「ともかくだ。雛奈、この辺の周囲十メートルくらいを燃やせるか？」

「はあっ！？ 疾那、知ってるかしらこのデザインでは国有地の森を燃やすことは犯罪なのよ」

「俺のデザインもそうだったからな、よく知っている。もちろんただ燃やすわけじゃない。いや、『燃えるわけがないんだ』」

「どういうことかしら？」

「この辺の草や木はは普通じゃないんだ。見た目ではわからないだろうが、俺たち彩人ならなんとなくその違和感に気付けるはずだ」

疾那に言われ雛奈は大人しくその言葉を確かめるため近くの木を凝視する。

すると雛奈は何かに気付いたらしく口を開く。

「確かに、なんというか薄っすら赤いオーラみたいなものが見えるわね」

「だろ。それは赤のカラーの影響を受けている証拠だ。赤のカラーの影響を受けている物は燃えて広がらずにすぐに燃え尽きる」

「ふんふん、とりあえず燃やしても大丈夫な理由はわかったわ。」

で、なんで燃やす必要があるのかしら？」

「まあそれは説明するよりも見てもらった方が早い。とりあえずやってみてくれ」

雛奈は手に小さな火種を乗せ、それに息を吹きかけた。

するとその炎は瞬く間に周囲の草木に広がり、それらを燃やす。数秒経ったとき、それらは燃え尽きた。

「本当に早く燃え尽きるわね。ってこれは！？」

燃やした草の下から出てきたのは隠し扉だった。

「そうだ、この辺りにあるのに形が見えないのなら理由は一つ。地面の下にあるんだよ」

そう言いながら隠し扉を指さした。

雛奈が扉を開けるとそこには階段があり、うつすらと明かりもついていた。

秘密基地というよりもどちらかというと隠れ家に近いだろう。

「ここからは厳しい戦いになるわよ？」

「だろうな」

「わかってるならよろしい」

そう言ってニヤッと雛奈は笑って階段を降りた。疾那もそれに黙ってついていった。

階段はそれほど段数はなく、二分ほどで終わった。

階段が終わるとそこには扉があるだけで周りは一面壁。息が詰まりそうな空間だった。

雛奈は疾那とアイコンタクトで「開けた瞬間に襲撃される可能性もあるから油断しないで」と会話した。（当たり前だが疾那はアイコンタクトの内容を理解していない）

勢いよく雛奈はドアを開け両手にトンファーを構えた。疾那はそれに遅れて宙に「空」の文字を書いて逆刃刀を構えた。

ドアの向こうに広がったのはかなり広い空間だった。

並みの学校の体育館ほどの高さで広さ。

ここが地下とは到底思えない場所だ。

そしてその正面の一番奥には一人の女性とその両脇に三人の男性がいた。

男性のうち二人は俺たちを襲った白衣の男と同じように片目が赤く、女性は両目が赤くなっていた。

雛奈の話を聞く限りあの女性が赤季でありヴィンセントなのだろう。赤のカラーに魅入られた女性だ。

ヴィンセントに向かい疾那と雛奈は歩く。

そしてお互いの声が届くような距離にまで近づくと雛奈は言葉を発した。

「赤季！」

「私のことはヴィンセントとお呼びください」

「赤」

「ヴィンセントです」

「あ」

「ヴィンセントだと言っているでしょう!」

「「お前らしい加減にしろよ」」

疾那と唯一目が赤に染まっていない男が同時に言う。
お互いの立ち位置は近いようだ。

「まあいいわ。で、ヴィンセント、かしら？ あなたは何がしたいのかしら？」

「もちろん世界の破壊です」

「自分に痛々しい厨二の名前を付けたと思ったら次は世界を壊す？
あなたいつから馬鹿になったのかしら？」

「貧乳のパワー馬鹿に言われたくないですね」

「あなたより頭いいわよ、私。それに、胸の大きい女は大抵馬鹿
って決まってるのよ」

「負け惜しみです？」

「こっちのセリフよ」

「早く話を解決しようとしてくれ。そろそろ面倒になってきた」

口ではそうは言っているが、疾那の見た目からはそういう感情は読み取れなかった。

冗談で言っているとかではなく、本気で言っているのだがそれが表情に出ないだけだ。

「単刀直入に言うわ。赤——ヴィンセント、そのペンダントをよこしなさい」

「答えはノーです。何故渡す必要があるのですか？」

「それが世界を必要するために必要だからよ」

「さつきあなたが言ったセリフを繰り返してあげましょうか？」

「聞かないなら……無理やり聞かせるまでよ？」

「できるものなら」

その言葉を皮切りに二人のにらみ合いが始まった。
地下空間に静寂が広がる。

唾をのむ音、まばたきの音さえも鮮明に響き渡るかのようだった。

その静寂を切り裂いたのは意外にも目の色が染まっていない男だった。

狙いは雛奈ではなく疾那に一直線。

腰から抜いたレイピアを疾那に向けて突き刺した。

「くっ」

それを剣で受けるが、疾那は一方後退した。
そして剣を払い距離を取る。

疾那と男が交戦したのを見て雛奈はヴィンセントに向かって真っすぐ走り始めた。

片目が染まっている二人の男が妨害しようとしたがヴィンセントはそれを片手で制し、疾那の元へ行かせた。

雛奈が振るったトンファは宙を切り、地面を破壊した。

「相変わらずの力ですね。だけど力だけでは私には勝てません」

「勝てないかどうかは私が決めるのよ」

二人の距離はまた離れた。

疾那の元にはレイピアを振るった男に片目が染まった男の三人が集っていた。

三体一である。

「とりあえず礼儀だ、名乗っておくでしょう。俺の名前は黒釣くろつり鳥からす。今は赤……じゃねえか、ヴィンセントに付き合ってる事情でフアルクと名乗ってるがな」

「あいつは本当は何をしようとしてるんだ？」

疾那が質問するとフアルクは両手を上げ、やれやれという表情を浮かべる。

そして馬鹿にしたような口調で口を開いた。

「まあ話は最後まで聞けよ。で後ろのでかい外人っぽいのがジャ

ツク クリムゾンことサム。ひねくれ者っぽい見た目のやつが伊崎いさき火雀ひなせことマルクだ」

「で、お前らの目的はなんなんだ？」

再び質問した疾那に単純に驚くファルク。

驚いた理由は簡単で、悪意も何かを狙ったわけではなく純粋に同じ質問を名乗った直後に言ったからだ。

ファルクはそれに何か気持ち悪いものを感じた。

「お前機械かなんかなのか？ まあ、それは内緒だ。軒並みに俺たちを倒したら教えてやるよ、とでも言うておくぜ」

それを聞いて疾那は軽く剣を一度振り、雛奈を真似たドヤ顔で答えた。

「俺の名前は桜木 疾那だ。さあ、かかってこいよ」

赤の世界 四話 「圧倒」

疾那は目の前にいる三人を視界に入れる。

そして三人の見た目を見て、それぞれがどのくらいの強さを計る。

——サムとかいうやつは単純に筋肉量が多くて一撃が重そうだな。

——マルクは体こそ細いが全体的にバランスのいい体つきだ。それに体にいくつもの武器を隠してるように見えるな。

——ファルクは……読めないな。とりあえず武器はレイピアか。

それを理解し、疾那はまずサムを狙うことを決めた。

その理由は簡単でマルクとファルクは武器を持っているため手数で負けると思ったからだ。

ならば先に倒せそうなやつを倒しておいて、相手の数を減らすのが正解だと判断した。

疾那は、サムの懷に飛び込み、剣の鞘で鳩尾をとりあえず打った。それに対してサムは動くことすらなく受け、後ろに数センチ飛ぶ。

——数……センチだと。

それがサムが疾那の攻撃を受け切ったことだと気づくのに時間はかからなかった。

次の瞬間疾那の体が数メートル吹き飛んだ。

訳が分からず頭の上に疑問符が浮くが、それは壁に衝突したことで消えた。

疾那は思い切りサムに殴られたのだ。

「はは、お前多分サムなら反応が遅そうだから速攻で倒せる、みたいに思っただろ？ 甘えよ、俺以外の二人はある特殊な能力の効果を受けてるからな、簡単にやあ倒されねえよ」

思考を読まれていたことに疾那は大した反応も見せずに次にどうすべきかを考えた。

しかし立ち上がったところで左腕に若干の違和感を感じたのに気付く。

左腕を見ると一部が赤く腫れていた。

触ってみると大した痛みはなかったが下手すればひびが入っている。それだけ重い攻撃だったということだ。

「となると次に狙うのは必然的にマルクになるのか」

目線の先にマルクを据えて疾那は右手に剣を左手に鞘を握った。それを見てファルクが楽しそうに口の端を釣り上げたが疾那はそれに気づかない。

マルクが一步目を踏み出したのはその直後だった。

懐から取り出したナイフを二本持って疾那へと迫る。

左手に持ったナイフをやや大振りに翳し切りかかった。

特に焦る様子もなく疾那は左手に持った鞘でガードして、右足でマルクの胴体へ蹴りを打つ。

だがそれは当たることはなかった。

その理由はマルクが思い切り体を捻り、疾那の体にナイフを突きつけたからだ。

疾那もギリギリで反応することで避けたがそれにより、蹴りの狙いも外れる。

結果的にお互いの攻撃は空を切ることになった。

だがマルクはそれでも引かずにナイフを突きつける。

狙いは真っ直ぐ疾那の首筋。

まったく揺らぐことのない明確な殺意が見て取れた。

—— 適当に剣先でいなして蹴りで脳天でも揺らせば流石に倒れるか

考えたとおりに疾那は行動を始める。

いや、性格にははじめようとした。

だがその瞬間、マルクは突きつけた逆のナイフを思い切り投げつけた。

それを疾那は剣を振って弾く。

「詰みだ……逆に」

首筋にナイフが迫る。

それに体が動きを一瞬だけ止める。

そして再び動き始まる。

剣の鞘をマルクの首の正面に「置いた」。

それにマルクは突っ込み首元を強打した。

「ごほっ!？」

それに容赦なく疾那は蹴り付け、ぐらついた所を鞘でもう一度突き飛ばした。

マルクの体はさっきのサムとは違い簡単にとび、疾那ほどとは言わないまでも結構な距離を飛んだ。

「なんとなくわかった。その二人は自分の意思で行動をしてない

な」

「ほう、すごいな。その通り、二人とも洗脳されてる」

「サムの方はひたすらカウンターを狙うように、マルクの方は少しでも攻め入る隙があれば攻撃して行けとでも命令してるのか」

「……へえ、そこまでバレちゃってるか。すごいな、脱帽ものだ」

そういうファルクの表情は嘘ではなく本心そのもののように見えた。

もっともその言葉は本心さえ隠しているファルクの前では正しいかわからないのだが、疾那が知る由はなかった。

「だがそれらは全て俺の指ばっちん一つで書き変わる命令だぜ？」

そしてファルクは指ばっちんを鳴らす。

同時にサムの巨体が疾那の体へと襲い掛かる。

剣を抜いてサムの体との距離を測りながら回避の準備をする。

「……オラア」

振られた右腕をひらり、とかわして次の攻撃の準備をする。

鞘を思い切り頭に打ち付けてその対応によって次の動きを考えるか、と疾那は考えていた。

「……油断大敵、逆に」

「なっ」

その思考は後ろから襲いかかったマルクの攻撃によって止められた。

——マルクとサムの命令は入れ替わったはず。なのになぜマルクが攻撃を……。

——考えられる可能性は一つか。……指ばっちは命令を入れ替えるのではなく、もう一つの命令の始動キー！。

よろけた体を起こす疾那。

しかしそこにサムの右腕が再び襲い掛かる。

壁へと叩きつけられる疾那。

体のどこかの骨が折れ、口の端から血が流れた。

疾那にしては珍しく小さなうめき声をあげる。

「騙されたか、つまらん。そこは騙されずにギリギリで気づいて反撃つてのがセオリーだよな」

「知るか。俺に文句を言うな」

「はあ……。興ざめだな、こついつの。まあいい、そろそろ殺しにかかる」

壁に寄りかかったままの疾那の元にファルクが突っ込んで行く。

レイピアを右手に持ち、明確な殺意持ちながら疾那へと向かう。

疾那は剣を取りながらフラフラの体を持ち上げ、回避するべきか攻撃に回るべきかを考えている。

とりあえずは避けた方がいいという考えにまとまり、体を右へと逸らした。

「甘いッ」

「ぐっ」

避けたのさえバレていて、左腕にレイピアが突き刺さった。それに小さなうめき声をあげる。

だがそれを疾那はチャンスとも思っていた。

レイピアが刺さっているということは、動くことができないからだ。

剣をファルクの動体へと向けて突き刺す。

だがファルクも流石にそれは予想していたようで掠る程度に終わった。

お返しにと言わんばかりにファルクの左足が疾那の体を再び壁へと叩きつける。

「弱いな。ここまで弱いとは予想外だったよ。まあ、3対1だから仕方ないが、それを含めても弱すぎる」

「人を……倒れてる間に……散々言ってくれるな……」

立ち上がる疾那の体はボロボロになっていた。

あばらは数本折れているし、全身に打ち身もある。

満身創痍、まではいかないにしてもかなりのダメージだった。

そんな体で疾那はもう一度冷静に状況を確認した。

——サムは「極力カウンターを狙う」ように動いている。

——マルクは「攻め込むタイミングがあれば極力攻め込む」ように動いている。

——ファルクの指ぱっちは二人に「時間差で攻撃を仕掛ける」という指示を出す合図。

そこまで考えて、やはり考えられた作戦だな、と疾那は息を吐いた。

やはり奥義や剣技を使うしかなかった。

だが使うにしても一瞬でもファルクから距離を取らなくては使うことができない。

近くにあつた瓦礫を右手でつかんだ。

「あれだよな、お前は剣士なのに決め手に欠く。全てが地味なんだよ。漫画や小説風に言えば必殺技？　がねえんだよ」

「一応あるにはあるさ。お前相手には使わないだけでな」

「言ってくれるじゃ——っ!？」

ファルクがしゃべると同時に疾那は瓦礫を投げつけた。

後ろにのけ反つたのを見て剣の鞘を体につきつける。

腹部に叩き込んだ攻撃は綺麗に吸い込まれ、ファルクの体はよろけ始めた。

その隙に疾那は距離を取る。

そして意識を集中させ、自分の剣を体の一部に取り込むイメージを練った。

集中しきつたところで疾那は静かに技名を口にする。

「参の太刀……風花」

剣を思い切り振り、そこから出る剣撃波で相手を攻撃する剣技。それが風花だった。

威力こそ高くないものの牽制としては十分すぎる威力だ。

その証拠に三人も体中を引き裂かれていた。

攻撃としても成功している風花に対して疾那だけが不満を残していた。

——威力が……足りない。

自分が目標としているそれにやはり届かない。

これももしかするとカラーを手に入れていないからかもしれない、
と言いつてすることで自分をごまかす。

それが本当かどうかはもう少しすればわかることだ。

「というか……そうなんだよな。俺、別に勝つ必要ないよな」

そうなのだ。

疾那は勝たなくとも雛奈が勝つことができれば、それでカラーは手に入るし、カラーが消えたことで洗脳も解除される。

だから勝つ必要はまったくないのだ。

そんな主人公らしからぬ思考をしている疾那に誰一人気づくことはなかった。

「まあ、それでも勝てるに越したことはないか。少し、頑張るか
な」

剣を軽く振りながら疾那は一人呟いた。

赤の世界 五話 「反撃」

疾那は勝つための手段を考え始めた。

頭の中では勝たなくてもいいかと思いつつもどこかで勝ちたい、と思っている。

それが赤のカラーの影響だということに疾那は気づいていなかった。赤の、「暴力」の影響を受けているということに。

「ちよつと、驚いたな。お前にもああいう技があるなら初めから使えばよかっただろう」

「まあこつちにもいろいろあるんだ。安心しろ、もう使わない」

「使わない……？ 使えないじゃなくて、か。おい、舐めてるのか？」

「こつちにもいろいろあると言ってるだろ。使いたくないんだよ、『こんな状態』じゃ」

と、話だけ聴けば疾那は余裕さをアピールしているように見えるが実際はかなり厳しい状況だった。

三対一という時点でかなり不利なのに、それに加え相手は複数の戦闘パターンを持っている。

だが一番状況を悪くしてるのはサムとマルクの二人が洗脳されているため、恐怖心などがまったくなく攻撃してくることだ。

普通は剣などで切りかかれれば少しは防御に回ったり、攻撃を躊躇ったりする。

だが操られてそんな気持ちのない二人はただ命令に従うだけの機械

だ。

攻撃をくらうことに躊躇もなければ、俺に攻撃することにも躊躇がない。

疾那も攻撃を喰らうことに躊躇はないつもりだった。

しかし、攻撃をすることには少し、ほんの少しだけの躊躇がある。

疾那は軽く剣を振り、どうするべきかを考えた。

付け入る隙がもしあるとすればそれはあいつらの洗脳だと思った。

洗脳の内容は固定されている。

一応指ぱっちんでスイッチするとは言え、それでも二種類ずつの行動しかできない。

「そういえば、指ぱっちんでスイッチするのはあいつの指ぱっちんじゃなきゃいけないのか……？」

普通に考えればそうなのだが、もしかして……という可能性もある。

試す価値は充分にあった。

——試すならサム相手か。マルクはどちらにせよ攻撃するんだから意味がないよな

俺はサムに向かって走った。

サムの巨体で俺の動きがファルクには見えないような絶妙な角度で攻め込む。

途中でマルクが邪魔をしようとしてきたが、それを鞘を投げて妨害した。

そして疾那は指ぱっちんを出来るだけ小さな音で、しかしサムに聞こえる音で鳴らした。

しかしサムに動きはなく、俺をただ見つめているだけだった。
やはり、指ばっちんだけではダメだったようだ。

ではあの指示だすためのもう一つの条件はなんなのだろうか。
疾那は思考した。

それを見ていたファルクは愉快そうに笑いをもらした。
人の必死に頑張っている様を見ているのは最高に楽しい。
それが叶う叶わないは別にしてだ。

「疾那だったか、あいつを見てみると昔の赤李を思い出すな。必
死に努力して何かを得ようとしていたときを」

遠くを見て昔のヴィンセントを思い出すファルク。
その表情は嬉しそうでもあり、どこか哀愁も漂わしていた。
『昔の赤李』であって『今のヴィンセント』ではないのだ。
その現実がファルクの心を締め付けていた。

「まあ、これもあいつが解決してくれるだろうな。あの、神楽坂
雛奈が」

だからこそファルクたちはあいつを足止めしなければならなかつ
た。

ヴィンセントと雛奈の戦いを邪魔させないためにも。

「にしても疾那もよく頑張るな。必死にどれがキーかを探つてや
がる」

さっきからファルクに見えない位置から疾那が指ばっちんなどを

試しているのはなんとなくでわかっていた。

だがそれだけでは絶対に当てようがない。

ファルクも馬鹿じゃないのだ。

あれだけの動作でも敵に利用されないために色々工夫している。

——これはそれにあいつが気づくのが先か、それともが俺が先か。

そんなゲームなのだろうとファルクは思っていた。

人の人生をゲームで例えるのも少し不謹慎だと思うが。

そう、これはヴィンセントの一生に関わるのだ。

同時にファルクは気づいてはいないのだが、疾那の一生の問題でもあった。

大きく括れば全ての世界の問題でもあるのだが。

「さて、俺もそろそろ混ざってみるか。あいつはどれくらいで詰むかな」

レイピアを右手に構えファルクは疾那に向かい一直線に走り出した。

疾那は指ばっちんだけではスイッチを切り替えることは出来ないということに気付いた。

まあよく考えればそれだけでは自分が切り替えやすいという以上に、今の疾那のような人間に利用されやすいのだから当然なのだが。

とは言ってもそれが思いつかない。

余裕を持って考える時間も隙もないのが原因だ。

日常生活でゲームをしているときならともかく、今は戦闘中なのだ。

「よく考えればわかりそうなのにな。だがファルクが出来ること、という条件ならだいたい絞れてくるな」

マルクの攻撃を受け流しながら疾那は考える。

とつと攻撃を当ててマルクを気絶させてもいいのだが、マルクはどこに何を仕込んでいるかわかったもんじゃないため不用意な大振りの攻撃は危険だった。

それにその隙にまたファルクがスイッチさせる可能性もなかったわけじゃない。

ともかく、疾那は出来る限り慎重に行動する必要があった。疾那は負けなければ、勝ちになるのだから焦る必要がないのがせめてもの救いだ。

マルクの攻撃を緩くいなし、背後を取り鞘打ちを狙う。

だがその瞬間背後から殺意を感じた。

無論それはファルク。

レイピアが右腕にかすり、痛みが走る。

剣を持っている左腕を振りファルクの胴体を狙う。

まっすぐ振った剣はファルクに当たる。

鈍い音がファルクの胴体から鳴り、疾那に流れが回ってきた。

右足でファルクの左足を踏みつけ、後退するのを止める。

だがレイピアを支点にし、右足で蹴りを放つ。

それを疾那は鞘で受け止めた。

そのまま頭突きで攻撃をする。

「あアッ!？」

うめき声を上げたるファルク。

頭突きをされたことで体が後ろに傾いていたが疾那が足を踏んでい
るため下がることは出来ない。

鞘でもう一度ファルクの胴体に攻撃を打つ。

「かはっ」

大きく息を吐くファルク。

しかしそれでも疾那との距離は離れることはない。

荒々しいラフスタイルの戦闘。

喧嘩慣れしている疾那だからこそその戦法だった。

それと同時に、剣術が使えない疾那の唯一の戦闘手段だ。

マルクが攻撃に参加してこないことを考えると、近くに仲間がい
ない場合は攻めないように洗脳されているのだろうか。
相変わらず便利な洗脳だな、と疾那は心の中で思った。

「くそっ、ふざけるなよ！」

流石にファルクもある程度場馴れしているようで俺の頭突きを喰
らってもダウンすることなくそのまま立っていた。

そしてレイピアを疾那の右足へと突きつけることで俺を無理やりは
がした。

寸前で避けたとは言え、足に刺さっていれば俺は勝負ができなくな
っていただろう。

普通ならこれで気絶、それでなくとも戦意喪失くらいはなるもの
だが、やはりただの不良とは覚悟も力もまるで違う。

世界を巡る旅の最初の敵としては悪くない相手だ。

いや、充分に満足できる相手だった。

それによって、闘争本能がより増していくのを疾那も少しずつ感じ取っていた。

離れたファルクを追いかけてもう一度疾那は駆けた。

それを見た瞬間にファルクは右腕を高く上げ、そこで指ばっちんを鳴らす。

それによって背後にいたマルクとファルクの後ろにいたサムが疾那を狙うようになる。

まず疾那は後ろにいたマルクを蹴りつける。

マルクはそれをひらりと躲し、ナイフを投げつけた。

ファルクにレイピアで切られたところを偶然にもナイフは切り付け、痛みが返ってくる。

焼けそうな痛みに耐え、疾那は剣でマルクを切り付けた。

切り付けたと同時に、サムが攻撃をしてるのが視界の隅に入った。

どう考えても避けれるはずがなかった。

そうだサムの攻撃はガードではなくて、回避しなくてはいけない。

ガードしても疾那の強靱とはとても形容できない体つきではどちらにせよ大ダメージを負ってしまう。

こうなればダメ元だった。

どちらにせよ喰らってしまうなら試しても損はないだろう。

試すといったのは二つの意味だった。

一つはスイッチしている状態で指ばっちんを鳴らせば最初の状態に戻るかの確認。

そして二つはその指ばっちんを試す意味だった。

サムの右腕が飛んできた。

疾那はマルクを切り付けた剣で体を支え、左手で指ぱっちんを鳴らす。

鳴らした後一応左手でガードをした。

一秒後疾那の左腕に何かが当たった感覚はなかった。

つまり、スイッチを変えることに成功したのだ。

サムはいつの間にか後退していて、いつも通りカウンターを狙っている。

「おい、お前……何をした？」

ファルクの声に疾那は無表情のまま言葉を返した。

いつも通りの無感情で不感症なままに。

「俺が聞きたいよ」

赤の世界 六話 「機転」

疾那はスイッチを切り替えることに成功した。

それは偶然とはいえ確かな一歩だ。

勝利のための一個目だ。

「なんだその様子を見る限り偶然か。恐るるに足らん」

「いや、なんとなくだがわかった」

「はったりか？」

「そうだ」

「……否定しろよ」

疾那は素直だった。

もちろんユーモアのセンスがあつて、わざとこんなことを言つたわけではない。

本当になんとなくわかつてはいたが、少しだけはつたりの部分があったからこう答えたのだ。

疾那は剣を軽く振った。

「なあ、にしてもなんでお前はあいつに従っている」

疾那はファルクに尋ねた。

それにファルクは大したアクションもなしに、いつも通りの表情で答えた。

「大した理由じゃねえよ。腐れ縁だ」

「縁か。本当に大した理由じゃないな」

「だから先に言っただろうが」

「それもそうだな」

「……お前、よく話してて面白味がないと言われるだろ？」

「先週は8回言われたらしい。それも一人から」

そんなことを真顔で言う疾那にファルクは軽く笑った。

馬鹿馬鹿しいなあ、とか思いながら馬鹿にして笑う。

戦うことさえ馬鹿馬鹿しく思えた。

面倒だな、とさえ思った。

しかし、これはファルクの戦いではない。

ヴィンセントの戦いだ。

疾那の戦いではない。

雛奈の戦いだ。

男の戦いじゃない、女の争いだ。

だから男のすることは一つだ。

女の争える場所と時間を作る。

疾那とファルク達三人が戦う理由はそれだけで十分だった。

「まあ、お互い大変だな」

「……そうだな。まあ、ベストを尽くそうぜ」

それが合図かのように二人は剣とレイピアを交えた。

疾那の背後からマルクが迫る。

それをファルクと位置を入れ替わることで回避し、そのままファルクを押した。

押されたファルクはもちろんマルクに当たり、そのまま二人は転倒する。

直後、また指ぱっちんの音がした。

疾那はサムの姿を探す。

だがいない。

背後から風を切る音が聞こえた。

振り向かず疾那は鞘をおそらく顎があるだろうと思われる場所へと打つ。

指先に直撃した感覚が伝わる。

そのまま後ろ蹴りを打ち、サムの体を突き放す。

いや、突き放そうとした。

疾那の蹴りではやはりサムの体は飛ばず、動いただけだった。

「しょべえーな。しょばいしょばい、やってることがしょばいんだよ」

ファルクが大声でそんなことを言った。

マルクに支えてもらいながら面倒くさそうに立ち上がる姿を疾那は無言で見る。

そして髪を掻き上げて、見下した視線で疾那に更にこう言った。

「お前、勝ちたくねえのかよ？ お前がやってることはその場凌ぎだ。その場から動くつもりがあるように見えねえ。まったくに

がしたいのかわからないんだよな。つまんねえよ、そついうの」

散々な言われようだった。

昔から疾那は勘違いされることが多かったが、ここまでの言われ様は間違いなく初めてだった。

「お前は何か勘違いしている」

「あ……？ 何をだよ、言ってみろ」

「俺は別にその場凌ぎをしているつもりはない。ただ、状況を変える手段が見つからないだけだ。逆に言えば見つければすぐにでもお前らなんて瞬殺だ」

「……言ってくれるじゃねえか。出来るもんならしてみやがれ！」

ファルクはまた疾那に向かい突っ込む。

レイピアを振りかぶり疾那に突きを打つ。

疾那はそれを剣で受け、押し返した。

再び鳴る指ぱっちん。

襲い掛かるサム。

——やっぱり、条件は……。

疾那は今の動きで完全にスイッチの条件が分かった。

今までの全ての行動、動きを顧みてもそれは確かだった。

よく考えれば全てが伏線だったのだ。

ファルクの動きの全てが、俺の動きが、それらがスイッチの条件となっていた。

わかってしまえば簡単だ。
サムの動きは変えられる。

——俺は、思い切り剣を地面にたたきつけた。

「あいつ、まさかつ！？」

そして疾那は指ばっちんを鳴らす。

止まるサムの動き。

疾那の言葉を借りるところのスイッチが変わったのだ。

だからサムは元々の通り、カウンターを狙おうとしている。

つまり、疾那から攻撃しない限りは無害の存在になったのだ。

「やっぱりな」

「どうして……わかった？」

ファルクは疑問を口にする。

「お前が動くとき、常にレイピアを先に動かしていた。それがヒントだった。そして『お前が指ばっちんをするときには必ずレイピアを動かしていた』。だから俺の出した結論は『手に持っている物で音を鳴らしてから、指ばっちんを鳴らす』だった」

その言葉にファルクは本心で驚いた。
演技も偽りも一切ない本当の心で。

「流石……だな。まるで経験していたような洞察力だ。恐れ入る」

「恐れないでれ。是非とも平和的に俺はいたいんだ」

「……俺的にはこの勘違いで戦争が起こりそうで恐いよ」

「戦争はよくないな。人が死ぬというのは基本的にいいことじゃない」

疾那と会話する人間は疲れる、それを見事に表している会話だった。

基本的に話がかみ合わない為苦勞と苦勞が数倍になるのだ。

正確にはかみ合っていないというのも少し違い、はき違うの方が大分近い。

どこかで密接に話が関わっているのだが、そこ以外の箇所で関係していない。

それが余計に疲勞を増させているのだろう。

とは言っても所詮考察でしかないが。

「まあ俺の手の内は全部見せちまったわけだが、それで俺の負けに結びつくわけじゃない。所詮お前は俺のトリックを見破っただけなんだからな」

トリックを見破ったからと言って、手品は出来ない。

一を知って十を知るなんて無理で、精々知ることが出来るのは三程度だろう。

「それでも、俺の方に有利に傾いたのに違いはない。そしてお前は今、これ以上の種がないことも明かしてくれたしな」

手詰まり、とまでは言わないがファルクの比喻を借りるならシヨ―は終わってこっからはアンコールだ。

おまけ、蛇足、延長戦。
そんなものだ。

「勝てると思ったからそう言ったんだよ。理解しやがれ」

「理解し難いな」

「そうかい」

それ以上の会話は無駄と判断した。

男は黙って――

――切り合えばいいから

その後、剣とレイピアが交わった音が鳴ったのは言うまでもない。二人がほぼ零距离でぶつかっているため、マルクは乱入できず、一対一の攻防を繰り広げる他なかった。

今までファルクだけの戦闘はじっくりとは見ていなかったが、改めて見ると、中々に綺麗な戦いをする男だった。レイピアを使っていることからわかるように動きや攻撃が繊細だ。力任せの攻撃なんてことをしていたらすぐにレイピアなんて細いものは壊れてしまう。

蝶のように舞い蜂のように刺す、などという比喻があるが、ファルクの戦い方の綺麗さはその比ではない。

舞い方は蝶ではなくより繊細な、そして尚且つ危険を含む空の支配者鷹だった。

刺し方は蜂のような麻痺させる程度の毒ではなく華麗且つ獰猛な毒の支配者、蠍の用だった。

鷹のように舞い蹴のようにさす。

もはやどんな生物かもまるで判断できないが、つまりはだ。ファルクの動きの一つ一つに無駄がないのだ。

蝶のように風に流されない大空の支配者、鷹のように舞うから。蜂のような対処の使用がない毒の支配者、蹴のように刺すから。獰猛な静物、静かな危険物、ファルクを形容するならそんな風になる。

ニトログリセンのような一瞬で爆ぜる危険性である。

純粹な戦闘力で疾那がファルクに遅れをとることはまずあり得ない。

だが、戦闘技術では今の疾那はファルクに完敗していた。今の疾那は言うなら喧嘩殺法のようなものしか使えない。剣術を使わないからだ。

つまり五分五分。

お互いの利点がお互いの弱点をつぶし合っている状況だった。喰うか食われるか。そんな状況だ。

ファルクのレイピアがまっすぐ疾那の体を狙う。

疾那がそれをギリギリで避け、剣を振るう。

ファルクはそれに対し体を捻って、回し蹴りを打つ。

それと同時に疾那もファルクの体にボディブローを叩き込む。二人は同じタイミングで飛んだ。

「流石に強いな。まったくお前とは仲間として戦いたかったよ」

「仲間なら多分戦うこともなかっただろう」

「……それもそうか。まったく、因果なもんだよな」

ファルクは後ろに下がり、指ぱっちんを鳴らした。

後ろからは既にマルクが迫っていて反応が少し遅れたことに後悔する。

どうしてあんな直前までファルクの動作に気付かなかったのか。

マルクのナイフを手首をつかむことで止める。

しかしそれではサム攻撃を受けることができない。

だが、それでいいのだ。

疾那はマルクの体を蹴り飛ばし、それと同時に剣で地面を叩き、指ぱっちんを鳴らした。

それでスイッチが入れ替わり、二人の攻撃は停止した。

マルクに頭突きをしてから、もう一度蹴り飛ばし、ファルクの方向を向きなおす。

そして一步目を踏み出し味方が近くにいないファルクへと接近戦を再び開始する。

だが横から殺意を感じた。

そこにいたのはサムだった。

サムがいるだけなら問題はなかった。

正確に言えば、そこにいたのは『拳を振り下ろす直前のサム』だった。

よく考えれば、いやよく考えなくてもこれは罠だった。

そうだ、ファルクの指ぱっちんまでの動作に俺は気づかなかった。だが違うんだ。

していなかったんだから気づけるはずがなかったんだ。

ファルクは指ばっちんを鳴らしたただけだったんだ。

そして俺が剣を鳴らし、指ばっちんを鳴らしたことでスイッチが入り、サムが攻撃を開始した。

だから俺の近くにマルクがいるときに行動を起こした。

これが蠍の毒だった。

気づいたときには既に、死の目前。

直後、疾那にサムの拳が直撃した。

軽く数メートルは吹き飛び剣を手から放してしまった。

「かつ」

疾那の背中が壁へと叩きつけられた。

勢いがなくなっていたこともあって、埋まることこそなかったが結構な重症だった。

直撃を喰らった左腕は折れている。

折れていなくとも、ヒビくらいは絶対に入っている。

やはりサムの攻撃はそれだけ重いものだったということだ。

殴られたことで頭がスッキリしたからか、不思議と疾那の頭の中には勝つための手段が思いついていた。

やはりそれはトリックを使ったマジックで。

つまりそれは、いいとこどりのマジシャン泣かせの手段だった。

喧嘩では感じなかった痛みのする体を起こし、立ち上がる。

どこかに落としてしまった剣の代わりに近くにあった瓦礫を一個だけ持ってファルクを睨む。

「そろそろ、ケリをつけよう」

疾那とファルクの戦いは終わりを迎えようとしていた。

赤の世界 七話 「戦略」

疾那のコンディションは間違っても万全とは言えなかった。それどころか不全だ。

左腕はもちろん右腕にもダメージが全くないわけではない。

ダメージが酷いのはもちろん左手。

左手で鞘を振るのさえ躊躇われる状態だ。

それもそうだ、左手は折れている。

折れている手で攻撃をするなんて常識外れもいいところだ。論外だった。

にも関わらず疾那は立ち上がる。

諦めが悪いわけじゃない。

勝つための意図、勝ちの糸口が見えたからだ。

「またはったりか？ ふん、語彙の少ないことだな」

「断言してやろう、これははったりじゃない。俺はお前を倒す」

「ほう……。なら、俺も全力でそれを受けるまでだ」

ファルクはいつもどおりにレイピアを構える。

疾那は左手に瓦礫を持ったままで剣を構えた。

見合う二人。

攻撃を先に仕掛けたのは疾那だった。

保守側と革新派で動くのはもちろん後者だから。

思い切り瓦礫を振りかぶりファルクを狙う。

それに対しファルクは反射的にガードの構えを取る。

疾那の狙いはそれだった。

構えた隙を狙って疾那は全力で走り出す。

「しまった……！」

ファルクも頭が回る人間だ。

そのくらいのことにはすぐ気づいた。

だが問題はそこじゃない。

その後だ。

これから疾那が何をするか、ファルクはそれがまったくわからなかった。

それが恐ろしい。

恐ろしいほどに、怖い。

——あいつは、何を企んでいる！？

とりあえず疾那の元にマルクが攻撃を仕掛けた。

そんなことは疾那も承知しているはずだ。

ならばその次だ。

ファルクの取るべき行動は、疾那の予想していない行動はどれだろうか？

ファルクに残された選択肢は多くない。

ファルクが行くか、それともスイッチを切り替えサムを攻撃に移させるか。

二者択一だ。

どちらも行かないというのは問題なく問題外。

二人ともが行くというのも選択肢にはあるが、それはファルクの性格的になかった。

先に保守派という比喻を使ったが、それは偶然にも正鵠を射ている。保守的な男なのだファルクと言う男は。

前衛的ではなく後衛的、安全よりも安定を求めている。

だからファルクは人の裏をかくことは得意じゃなかった。

得意なのは、人に裏をかかれないことなのだ。

その違いは意外にも大きい。

——焦るな、焦るな！？ こういうときこそ落ち着くべきだろうが俺は！

同様に動揺を重ね、焦ったファルクが取った答えはスイッチを切り替えることだった。

いざというときに自分が外から見れる位置にいるほうが、安全だといや安定だと判断したのだ。

そういう意味ではファルクの行動は正しかったと言える。だが同時に疾那の思い通りの行動でもあった。

位置関係。

疾那とファルクら三人の位置関係は、疾那とファルクが正面に立ち、疾那から見て左手側にマルクが、右手側にサムがいる。

つまり疾那はサムとファルクに挟み撃ちで攻撃されているわけだ。

無論、疾那はそれに気づいていた。

気づいていた上での行動だ。

——しまった！？ まさかあいつの狙いは！

ファルクは疾那の狙いに気が付いた。
疾那の狙いがわかってしまった。
相打ち、それもサムとマルクの相打ちだ。

まず距離的にマルクが先に攻撃を仕掛ける。
それを避け、サムの方に押し飛ばしたらサムは命令通りに攻撃を仕掛けてしまう。

味方を狙わないとは言え、既に始めている攻撃を停止することは出来ない。
だからこそその相打ち。

「クソっ！ ふざけるなよ、俺はまだ気づいたんだ！」

——気づいたなら、まだ間に合う！

ファルクは再びスイッチを切り替えた。
それによりサムが攻撃からカウンターに切り替わる。

「かかったな。俺の……勝ちだ」

この戦いでは疾那の方が上手だった。

正確には、この状況に持っていかれた時点でファルクの負けはほぼ確定していた。

自身ではなくサムに攻撃に行かせた時点だ。
もっとも疾那はそう言うファルクの行動をある程度読んだうえでこの戦法を選んだのだが。

結論的に、サムとマルクの二人は疾那に戦闘の続行が困難になった。

サムはマルクの投げナイフと刺されたナイフにより。

マルクはサムの手により。

原因。

マルクが投げナイフでけん制をした。

それを疾那はそれを軽く回避する。

この時点でサムの左腕に二本の投げナイフが刺さった。

そしてナイフを刺そうと迫ってくるマルクの足を払い、転ばせる、前へと突っ込ませる。

サムの正面に突っ込んだマルクは思い切り殴られた。

仲間には攻撃しない二人だ。

自分を攻撃するやつを仲間だと思わないのは当然のことだった。

だからサムはカウンターをマルクに打ち放った。

もちろんのことマルクは気絶する。

マルクの刺したナイフはサムの腕に突き刺さった。

サムの右腕は使い物にならなくなった。

ここまでで二人は戦闘続行が困難。

ほぼ退場だった。

ファルクはその絵を見て絶句した。

驚かなかった、言葉を無くした。

「俺が……負ける？ ……ふ、ふざ、ふざけるなああああ！？」

俺はまだ負けてねえ！ 負けじゃねえんだよおおお！！」

レイピアを構えファルクは疾那へと走り抜けた。

鷹の爪が、蠍の毒が疾那を狙う。

疾那は剣でレイピアを受ける。

同時にそれを払い、右足を起点にして左足で回し蹴りを打ち込んだ。横腹に命中し、ファルクの体が一瞬浮く。

容赦なく空中に浮いているファルクの体を蹴り飛ばす。
後ろに倒れたファルクに疾那は乗りかかった。
もちろんレイピアは先に蹴り飛ばしておいた。
両腕の腕に足を乗せて動きも封じる。

そして首元に剣を突きつけた。
逆刃剣とは言え、それは脅しには充分。
これで積みだった。
諦めが悪くともこれは積みだ。

「俺の勝ちだ。負けを認める。じゃなくちゃ俺はお前をこのまま
殺さなくちゃいけない」

「うるせえよ、誰に向かって同情してんだよ。搭乗もしてやがる
みたいだしよ。俺はお前を気絶させなくちゃいけないんだよ」

「負けを……認める」

「笑わせんな」

疾那は剣を掲げる。

そして思い切り下に振りおとす。

しかしその瞬間、ファルクの足が疾那の首に絡まされた。

予想していなかった、ファルクの足がこれほどまでも上がってくることを。

足の力のままに振り飛ばされる疾那の体。

と言ってもほんの少ししか飛ばされてはいないのだが。
だがそれはファルクが立ち上がるのには十分だった。

「うおおおおおおお!!」

仕込みナイフ!

それはマルクだけの専売特許ではない。
常に安定を求める。

人の裏をかくことが苦手だから人の思考の裏を最初からつかんでおく。

それがファルクの考えだった。

疾那は立ち上がったばかりでそれを回避することは出来なかった。
だから、折れている左腕の関節を無理矢理、右腕で外した。
当然ゴキリツと鈍い音が鳴り関節が外れる。
痛みに疾那は苦痛の声を上げた。

「うぐあつ……」

痛みを堪え指ぱっちんを鳴らす。
するとどうなるか。

『右手で持っていた左腕の関節を外し音を鳴らし』指ぱっちんをするとうなるのか。

サムとマルクのスイッチが入れ替わるのだ。
マルクは行動不能だったが、サムは戦闘が困難だったただけだ。
つまり、戦うことができないわけではない。
疾那の後ろから迫るサム。

それを見たファルクは再びさっきの悲劇が起こることを警戒し、
動きを止めスイッチを切り替えさせた。
サムとファルクの動きが止まった。

だが、奇しくもそれもまた疾那の予想通りだった。
全てが掌の上で踊らされている。

「これで本当に終わりだ」

逆刃剣でファルクの鳩尾を思い切り突いた。
地面にうずくまるファルク。

これだけの攻撃を喰らえば当分は立ち上がることは出来ないだろう。

「もう一度だけ言う。負けを認めろ」

「……くそつたれが」

「俺は言つたぞ、『もう一度だけ』と」

「……わかつたよ。負けだ、負け。俺の負けだよ」

その言葉を聞いて疾那はぺたんと座り込んだ。
なにしろ左腕が折れているうえに関節が外れている。
普通の人間なら気絶していても何らおかしくない。
それでも疾那が平気なのはほぼ奇跡のようなものだっただろう。

「安心しろ、もうあんな状態のサムを攻撃させたりはしない。俺
は自分の次に友達を大切にする人間だ」

「自分の次なのか。じゃあ俺がお前を追撃しないためにサムにリ
スクを負わせてでも攻撃させるべきじゃないのか」

「馬鹿言え、サムとマルクとルイスとヴィンセントは仲間だ。仲
間は自分よりも優先に決まってるだろうが」

「素直じゃないな」

「冗談じゃない」

そんな風に疾那とファルクら三人の戦いは決着がついた。
もちろん勝利は疾那。

そのための代償は全身の負傷と左腕の骨折及び脱臼。
決して軽くない代償だった。

「アートの治してもらえたらいいんだけどな」

疾那はあんまり心配してなかった。

赤の世界 八話 「喧嘩」

疾那とファルクたちの戦いが終わったとき、やっと二人は会話を始めた。

疾那らが戦っていた時間は二十分くらいだったのだが、その間二人は一切口を聞いていなかった。

まるで話してはいけないうちに。

それがタブーであるかのように。

「赤季」

「しつこいですね。私はヴィンセントです」

「そうね、今の醜いあなたはヴィンセントでいいわ。あなたを赤季と言っては赤季に失礼なもの」

その言葉にヴィンセントは若干の苛つきを覚えながらも感情を表に出すことはなかった。

ヴィンセントは挑発に乗るような性格ではないのだ。

「私を醜いといいますか。それは言いえて妙なものですな。傲慢でこそないですけど、私は少しは美しいという自信はあったのですけど」

「わかんないの？ 私が醜いと言ったのはあなたの内面よ？」

漫画風に、あくまでフィクション的に表現するならここでヴィンセントの何かがブチリと切れる音がした、と表現する。

ノンフィクション的に表現するなら奥歯をギリツと鳴らしたとなる

のだが。
細かいことはどうでもいい。

ヴィンセントは自分の踏み入れられない部分にずかずかと踏み込まれたことに明確な苛つきを覚えていた。
抑えていたはずの感情なのに。
それをあつさりと超えてくる雛奈に些末の怒りさえ覚えていた。

仏の顔も三度までという言葉があるが、ヴィンセントの感情の制限は何回止めれるのだろうか。

「なんですか、嫉妬ですか？ あら、醜い」

「今のあなたには一生わからないわ」

その言葉を聞いてあくまで冷静的に、ヴィンセントはナイフを投げつけた。

マルクほどの技術を有していないヴィンセントの投擲はもちろん雛奈にかすることすらなく外れた。
そもそも当てる気がなかったのかもしれない。

「言いたいことがあるならはつきりと言ってください。イライラします」

「こういう言葉づかいはあんまりしたくないんだけどね……」

すうはあ、と深呼吸をして言葉を口にした。

「言いたいことがあるなら遠回しじゃなくて目の前で言えよこのクソビッチのブス女」

静かにヴィンセントはブチ切れた。

感情のダムが決壊したことでヴィンセントは至って真面目に切れた。

右手にはナイフ、左手にはカッター。

なんとも現実的な武器だった。

それに対して雛奈は意外にも素手で立ち向かう。

突き出されたナイフをかわし、追撃で振られたカッターを左手を掴むことで止める。

ヴィンセントの顔に自分の顔を近づけ雛奈はニヤリと笑いながら言った。

「私は武器も能力も一切使わない。ありのままの私であなたと戦うわ。だから全力でぶつかってきなさい」

「……な、な、な、何様なんですかあなたは！？ 女神にでもなつたつもり？ バッ——カじゃないんですか！？」

再びナイフが振られる。

もちろん雛奈に当たるわけがない。

雛奈は掴んでいた左手を解放し、ヴィンセントの背中を蹴り飛ばした。

「女神？ 馬鹿なことを言わないで、私は私よ。他の誰でもないわ」

「またそれですか！？ あなたはいつつも偉そうです！ 私の気持ちも知らずに！」

その言葉に雛奈は怪訝そうに首を傾げる。

——気持ち……？ それってどういう……？

考えてる途中にも遠慮なくヴィンセントは攻撃を仕掛けてくる。
ナイフとカッターが順に、時にランダムに振られる。
それを大した苦労もなく雛奈は回避する。

そもそも雛奈とヴィンセントの間には能力の差以前にもっと大きな身体能力の差がある。

それは疾那とファルクの戦闘力の差なんて生易しい差ではなく絶対的な差だ。

決して縮まることのない差。

そういう意味ではこれは消化試合だった。

ヴィンセントが倒されるのが早いか遅いか。

もちろんそれに雛奈が気づいていないわけがない。

それでお武器も、能力も使わないと制限をつけているのには理由があった。

これはヴィンセントを倒す戦いではなく、ヴィンセントを救う戦いなのだ。

だからちゃんと話合って戦うべきで、ただ戦えばいいというものではない。

雛奈はヴィンセントを説得するためにこの場に立っていた。

「あんたの気持ちってそれってどういう——」

「うるさいっ——」

カッターが投げられた。

話しかけた直後の上に、突然投げられたカッターに雛奈は一瞬反応が遅れ腕に切り傷を作ってしまった。

切り傷が熱を持ち痛みが走ったがそんなことはどうでもいい。

それよりもヴィンセントの気持ちを理解することが先だ。

重要なのはそっちなのだから。

「あなたには一生待ってもわからないわよ！ 最初から持っていた人間に私がどんなコンプレックスを抱いていたかなんてね！」

その言葉で雛奈はヴィンセントがこんなことをしたかの理由がだんだんと見えてきていた。

シルエットよりもおぼろげだがそれはだんだんと形に近づいている。だがそれではまだ説得には早い。

理解が足りない。

「わからないわよ。私にはあなたの気持ちがわからない」

「ほらやつぱりッ！ あなたなんかには……！ あなたなんかには絶対に……！」

「わからないわよ。だからわかろうとするんじゃない。私は諦めない。人を知りたい。人の気持ちに、人の思いに気付いてあげたい！」

「……ッ！ 偉そうに、いつまでも偉そうなんですよ」

「偉いわけがないでしょ！ あんたも私の気持ちなんてわかってない！」

「あなたみたいな私のコンプレックスの塊の気持ちなんてわかりたくないです！」

少女は糾弾し合う。

お互いの欠如していた情報を補い合うように心中を吐露していく。幼馴染だから一切の遠慮はなく、ライバルだから一つのためらいなく。

二人は叫びあう。

「なによコンプレックスの塊って……。私があんたに何かしたっていうの？」

「それは……！　そ、そんなことは関係な——」

「関係ないわけがないでしょ！」

雛奈の突然の否定にヴィンセントは言葉を止める。

「私がどれだけあんたのことを心配したと思ってるのよ……！　あなたが赤のカラーの影響を受けてから私がどれだけ胸が痛んだかわかってるの……？」

「なんですか、それじゃああなたは私のことをずっと心配していたとも言っんですか？」

「当たり前でしょう……！　あんたは、あんたはただ一人の幼馴染なんだから！」

「嘘です、そんなことはありません！」

「どうしてわからないの!? 私はあんたのことを一瞬たりとも心配しなかったことなんてなかった! 私はあんたのことが大事だから! だからっ、お願いだからそのペンダントを手放して!」

雛奈の言葉にヴィンセントの心が揺らいだ。

自分の、自分の憧れていた人間が自分のことを心配していてくれて、そして自分のことをずっと思っていたことで心が揺らぐ。赤の暴力の意思を押しつけて、その感情が支配していく。

「私は……あなたのことが嫌いでした」

「え？」

だから感情の整理をつけるためにヴィンセントは自分の思っていたことを全部吐き出すことにした。

雛奈がしたのと同じように。

自分の今まで思っていたことを全部口にした。

「いつでも、どれだけ私が努力しても私の上にいるあなたがずっと嫌いでした」

「……。なんとなくはわかってたわよ」

「ある日あなたが炎を出す超能力を得たときからが正しいですね。その日からずっと嫌いでした」

「打ち明けてくれるのは嬉しいんだけど嫌いって言うのを少しは抑えてくれないかしら？」

「無理です。私は何一つ努力せずにいつでもトップに立ちリーダ

ーになっっているあなたが憎くて憎くてたまりませんでした」

赤い瞳から涙がうつすらと流れ始めたのは気のせいかもしれない。
ヴィンセントは下を向いた。

「自分が、あなたが、嫌いで、嫌で、嫌悪して、憎悪して。私は
自分も嫌いになりました」

「……」

「だから！ 私の元にこのペンダントが来たときにものすごくうれしかったんです。自分にも特別な力が宿ったことが！」

言葉の端々に自嘲的な笑いが漏れていた。

過去の自分を、今の自分を笑っている。

それがなんとも悲しい。

なんとも、醜い。

「だから私は力を使える限り使ったわ。自分の力を誇示するためだけにね」

「そんなの——」

「間違えてるなんて知っています！ 間違えましたよ、間違えて何が悪いです！」

「あんた……本当に馬鹿ね」

「じゃあどうしろというんです！ あなたに勝つために他になにをすればよかったです！ 言うんです！」

もはや隠す意味すらないほどにヴィンセントは泣いていた。
自分の愚かさに、自分の間違いに気付けずに。

「そっから違つたよ。私はあんたに憧れてたのよ？」

「え……。嘘です、そんなのウソに決まっています！」

「美人でスタイルもいいあんたに！ 負けても負けても努力を続けることが出来るあんたに！ みんなに人気のあるあんたに！」

「適当ばかり言わないでください！」

「適当なわけがないでしょ。私はあんたにずっと憧れてたのよ。
昔のあんたに、赤季に……」

——嘘です。そんなの……。

ヴィンセントの心がその言葉を否定する。
あり得てはならないと否定する。
なぜなら、そんなことがあれば……。

——私が今までやってきたことはなんだったんですか……？

「償いつていうなら今からでも間に合うわ。だから、だから、今からでもそのペンダントを捨てなさい。それがあんたのせめてもの償いよ」

「……ごめんなさい」

「え？」

「だって悪いことしたらごめんなさい、ですよ。だからごめんなさい」

その言葉に雛奈は飽き飽きしたように笑った。

すぐに、明るい笑顔になり、ヴィンセントに笑いかける。

「謝るんならその相手は私じゃないでしょ？」

ヴィンセントはその言葉だけで気づくことができた。

だからヴィンセントはすたすたと、その人の元に歩いていく。

ファルク、そしてサムとマルクの元へと。

ルイスは……いないため仕方ない。

「本当に……本当に……ごめんさいっ！」

ファルクは優しく笑いながら、ヴィンセントの頭を撫でた。

鳩尾を突かれて悶えるような痛みがある中で、だ。

それにヴィンセントは耐えきれなくなつてついに涙をだらだらと流す。

さながらそれはヴィンセントの罪が流れていつているようだった。

こうして、赤の世界の問題は幼馴染の喧嘩で決着がついた。

あまりにもあっけなく、そしてあまりにも普通に、なによりも平和的に決着がついた。

しかし、彼女たちに日常が戻ってくるのはまだ先の話だった。

赤の世界 九話 「紅戦」

雛奈とヴィンセント——もとい赤季の喧嘩が終わった。
呆気なく、ある意味少女らしく終わった。

二人の喧嘩が終わった結果、疾那の元にペンダントが戻ってきた。
戻ってきたという表現が正しいかは謎だが。

「それが赤のペンダントか」

赤の色彩、怒りの感情をもたらす暴力の力。

戦いの記憶であり、紅の記憶。

疾那の一つ目の感情。

暴力の罪を背負う色。

「感情を取り戻すための方法はわかっているの？」

と、雛奈が疑問を口にした。

疾那は大したおもしろげもなく答える。

「ああ、なんとなくわかる。手にペンダントを持ったまま内包と
言えば取り戻されるはずだ」

頭のどこかにある記憶を手探りで思い出し、そう言った。
それが恐らく正しい。

「じゃあヴィンセント」

「赤季でいいわ」

「面倒なやつだ」

「なつ！？ 誰が面倒ですか！」

「早くしろ。俺も早く一つ目の感情が欲しい」

「っー！ 受け取ってください！」

そう言って思い切り疾那に投げつける赤季。

疾那はそれをキャッチしようとする。

「あ」

だがそれはキャッチを失敗し疾那の顔に当たった。

疾那は忘れていたのだ、自分の両腕がうまく使えないことを。
額に当たり地面に落ちたそれを拾う。

大切なものはずなのに随分ぞんざいな扱いだった。

疾那以外にはそれは大していい影響を与えるわけではない為当たり前なのだが。

「ぶっぶっぶ」

「……。まあいい」

横で笑う赤季を横目で軽く睨む。

感傷ありげに赤のペンダントを見る。

これにどんな感情が眠っているのか、それを考えていた。

「……内包」

疾那がそう言った瞬間だった。
世界が停止した。

疾那を中心に瞬間的な速さで世界が時を刻むのを止める。

赤の試練が始まる。

疾那が意識を取り戻すとそこは元居た地下ではなく真っ赤な空間だった。

どこまでも続く赤色の世界。

上を見上げれば紅の世界、下を見れば鮮血の地面が続く。

そんな世界で疾那は意識を取り戻した。

「ここはどこだ」

呟いた言葉は空間に反響することすらなく消えていった。
当たり前だが人の姿は見えなかった。

考えてみれば赤い空間というのであれば少しは心当たりがあった。
そう、疾那が意識を失ったのは『赤の感情を取り戻そうとした』から。

そう考えれば疾那が今いるのは赤の感情のカラーが作り上げた世界
という可能性が高い。

「とは言っても……ここでなにをすればいいのか」

何もない世界。

誰もいない世界。

赤い世界。
紅い世界。
一人の世界。
疾那の世界。

この世界には誰もおらず疾那が一人でただ永遠をこの赤い空間で過ごすのではないかと言う錯覚すら湧いていた。
考えるとゾツとする想像だ。
しかし疾那の感情のなさを考えればそれさえ理解してないかもしれない。

しかしそんな考えは一つの声でかき消された。

「悪い、少し遅れた」

背後からした声はハスキー気味の女性のものだった。

振り向くとそこには赤のジャージ上下に紅のショートカットで真っ赤な瞳をした女性が立っていた。

全身赤色。

背景と混ざって正直顔以外が見にくい。

ジャージの袖と裾をまくっているのがせめてもの救いだった。

「遅れたとはどういう意味だ」

「細かいことはいいんだ。私の名前は紅李^{くれい}だ、よろしく頼む。さて、前振り以上早速テストだ」

と言って女性、紅李はファイティングポーズをとった。

戦闘開始の合図でもあった。

疾那は内心でまた戦いか、と悪態をついていたがそれを表情に出す

ことはない。

それで疾那は思い出したがとてもじゃないが戦える状態ではなかったはずだ。

「治っている……？」

そう、ファルクとの戦いで折れたはずの左腕はもちろん全身のけがなどもすべてが治っていた。

治癒、と言うよりももとに戻った感じた。

「説明不足だったな。ここはお前の精神世界だ。だからお前は万全の状態でここに入ってくる」

「ふむ、わかった」

と言って宙に「空」の文字を書いて手に逆刃剣を手にとった。

「テストのクリア条件は簡単。私を納得させる。できればクリアとして、お前の中に私、赤の感情は戻ってやろう」

「わかった。さあ戦いを始めるとしようか」

二人は睨み合い、構えた。

だがバトルパートの突入にはまだ早かったらしい。

「まあ戦闘能力はともかくとしてだ、とりあえずお前とトークでしておきたい。それこそ本当にお前がお前かを確かめる意味合いでな」

「いや俺は間違いなく俺だろう」

「万が一もあるだろう。お前がお前であってもお前でない、とか
な」

「たぶん漫画の見すぎだ」

「この世界に漫画なんて娯楽はない。あるのは世界の暴力の記憶
だけだ」

暴力の記憶。

つまりそれは喧嘩であつたり、暴行であつたり、戦争であつたり。
広い意味では討論なども言葉の暴力なんて比喻されるあたり、含ま
れるのだろう。

争いばかり見てきた紅李の性格はだから荒っぽいものだった。
戦いといえばほとんどが暴言だからだ。
感情のままに言葉を吐き出している人間がほとんどだろう。

冷静だったファルクも最後の最後には暴言を吐いていた。
それを責めることはできない。
それも疾那の感情の一つであり、人間が生きている間に犯す七つの
大罪の一つだからだ。

とりあえず閑話休題、話を元に戻そう。

それらの記憶があるということは、紅李の戦闘能力は、少なくとも
戦術はかなりのものだと言ってきた。
すべての戦いを覚えているから、喧嘩殺法も剣術も小細工もミスリ
ードもスィッチも何もかもが見ているということだ。

それはもちろん疾那とファルクの戦いも見ているということだろ

う。

つまりは見透かされた戦術ということ。

疾那の戦い方はひとつの例外なく理解されているだろう。

とは言っても疾那自体それほど戦い方を持っていないのだが。

「話が逸れたな。さて、お前は誰だ？」

「本気でそこから行くのか」

「私は形を大事にするタイプだ」

格闘家だからね、と紅李は付け足した。

「格闘家だったのか」

「性格には戦闘狂だ」

「自分で狂うとか言うな。俺もみたいに聞こえるだろ」

あっはっはっは、と紅李は豪快に笑った。

男らしい笑い方だった。

もつとも笑わない疾那とは比較のしようがないのだが。

「ところで君は誰だ」

「もう流せよその話題」

「だから私は」

と再びさっきのやりとりが繰り返されようとしていた。
それを察したのか疾那はそれを遮り言葉を紡いだ。

「わかった。俺が悪かった。俺は桜木疾那だ」

「よろしい、本物だな」

「それだけでいいのかよ」

「ああ、格闘家だからな」

「なんて都合の言い訳だ」

疾那でさえ呆れていた。

流石疾那の他人格。

赤の人格は脳筋だったようだ。

「じゃあ戦うか」

「名前しか聞かないのか」

「余計なことはしない主義でな」

「さっきの時間はどうしたんだよ」

「なかったことにした。というかしろ」

疾那はついに黙った。

ダメだ、こいつ早く何とかしないと状態である。
とりあえずギャグパートは終了らしい。

こっからバトルパート。
空っぽ対脳筋。

「じゃあバトル——開始だ」

と紅李は言った。

言ったが、だ。

紅李は「バトル」と言い切ったあたりで疾那を既に殴っていた。
なんて素晴らしいスポーツマンシップだろう。

無抵抗、と言うか無反応のときに攻撃されたため疾那は一切の抵抗もなく吹き飛ばされた。

サムよりも見た目は何倍も細い紅李だが、その攻撃の威力は比べ物にならなかった。

そのまま数メートル吹き飛んでやっと疾那の体は止まった。

「ゴングを鳴らさねば戦いを始めれないものはその時点で三流なんだぜ。つまり、生まれたときから常に戦場だと思わねば既に戦士ではないということだ」

「お前は戦士じゃなくて格闘家だろう」

「いや違うね。私は戦闘家だ。戦い、闘うことを生業にしている」

コロコロ意見を変えるやつだ、と疾那は内心嘯いた。

不意打ちだったということを除いても紅李の攻撃は重かった。

鉛のような攻撃、と言う表現があるが紅李の場合は車のような攻撃と表現したい。

攻撃が当たる瞬間、あれはもはや事故だ。

「さつきこの世界では常に万全の状態にいる、みたいなことを言ったが訂正しよう。ここで受けたダメージはそのまま蓄積する」

「予想通りだよ……」

疾那は逆刃剣を支えに立ち上がる。

足取りはフラフラだ。

一見見た目にダメージはないが体の内側のダメージがすさまじかった。

殴られたのは腹部だった。

そこを今見ても恐らく青あざすらないだろう。

だが内面は、臓器もしくは筋肉事態にダメージが蓄積している。

それで疾那は戦闘家と言う言葉に納得した。

戦い、闘い続けるということはだ、それは相手がいなければいけない。

つまり紅李は派手な攻撃をしつつも骨を折るなどして相手の行動を制限させず、そしてなおかつ相手の全力を見たい。

だからこそ内側への攻撃だ。

そいつの力の真価を見るための攻撃だ。

「やっぱりお前は戦闘狂だよ」

「その通り。肯定しよう」

返事をしたとき紅李は疾那の目の前に立っていた。

疾那はその事実にあきづくのに時間がかかってしまった。それが命取りだった。

「なっ——」

気づいた瞬間には疾那の胸部に紅李の足が蹴りつけられていた。今度はあまり距離を飛ばなかったが、ダメージがより内部に集中していた。

攻撃が当たったのは右の胸部だ。つまり、肺だ。

「カハッ——。かはっ——」

呼吸が止まった。

動きが止まった。

体の運動が停止した。

停止した間に攻撃の手を止めてくれるほど紅李は優しくはなかった。

空中を飛び更にはそのまま体を捻って、疾那の体を地面へと打ち付ける。

打ち付け、踏みつける。

疾那の胸部が軋み、呼吸が完全に停止し逆流した。

それでもまだ紅李の攻撃は止まらない。

疾那の視界に振り上げられた右腕が映った。

それと同時に無意識のうちに理解した。

——流石にこれを受ければマズイ

「つつあああッ！」

体を無理やりに捻り紅李の拳を避けた。

無様な回避をした疾那の目に映ったのは穴の開いた地面だった。地面と言うのは正確でないにしろ、空間が削り取られていた。馬鹿げた威力だった。

これが疾那に直撃していたら絶命の可能性さえありえただろう。

それに見とれることもなく疾那は立ち上がり紅李との距離を取った。

まだ呼吸は不自由だができないということもない。

すうはあと息を吸い吐き出す度に肋骨が軋む音が聞こえた。

「お前……本当に俺かよ」

「ああ、私は確かにお前だよ。お前は無感情と言う感情に何もな
いという罪、まあ名前を付けるなら虚無の罪に特化された存在だ」
おまえ

削り取られた空間からゆっくりと拳を引き抜く紅李。

「それと同じように私は怒りや闘志と言った感情、暴力の罪に特
化された存在なんだよ。おまえだから単純な身体能力だけなら疾那の感情
の中ではトップだよ。わたしたち」

多分総合力じゃあ真ん中くらいだと思うけどな、と紅李は付け足した。

適材適所、とは少し違うがそれでもそれぞれが特化されたものだけを持ち、それを鍛えているというのは納得には行った。

赤の怒り、桃の愛情、青の悲しみ、緑の探求心、灰の無気力、白の善意、黒の悪意、そして無色の虚無。
おれ

七つの感情があるから人間がある。

人間と言う生物を作り出している要素だった。

その一つにだけ特化しているから欠片であり、カラーなのだ。

「よく考えたらそうなんだよな。桜木疾那、無色のカラー。お前はまだ一つもカラーを手に入れてないんだよな。じゃあ私には絶対勝てねえわ」

かつはつはつは、紅李は豪快に笑いながら言った。

伝え忘れた予定を終わった後に言うような無意味な内容を喋るのかのような口調でそう言う。

疾那にとっては重要な事実でも紅李には何の意味もない事実なのだから当たり前なのだが。

「そうだよなお前はそうだ。何も特化しないことに特化してるお前が私に勝てるはずがねえんだよ。かつはつは、お姉さんこりゃうつかりしてたなあ」

「で、どうしたいわけだ。いや違うな——どうなるわけだ？」

「私がお前を認める条件を変えよう。私に有効打を一発でも決めたら合格だ」

「有効打の基準はどうなっている」

「牽制なんてチャチなものじゃない、ちゃんとした攻撃が私に当たればいい」

「把握した」

その返事を言い終えてから疾那は構えなおした。いつもと同じ、自分らしい構え方で。

実は疾那はこの空間に来てから記憶が戻ってくる感覚に襲われていた。

その記憶と言うのが桜木流剣術の技の記憶だった。

更に正確に言うなら『壺の太刀いちのたち 飛椿おちつばき』の記憶だ。

下から上に切り上げる剣技の一番基本の技。

本来は剣技同士のつなぎの技なのだがこの場合は仕方ないだろう。

「一撃だ、一撃で決めてやる」

「いやいや、最初から一撃決めたら終わりって言ってるんだからさ、そりゃそうだろう」

「……。行くぞ」

「無視かよ。酷いことするな」

言葉と裏腹に紅李の表情は笑っていた。

目の前の敵を楽しむように、初めての戦いに。

そう、紅李は知識こそ、知識を自分の動きに取り入れることはしてきたのだが、意外にも実践はこれが初めてだった。

その結果がさっきのあれなのだが、あれも何度も重ねたシャドートレーニングの結果と言えた。

精度を増し、正度を上げて、鋭度を高めるための訓練をし続けた。

一人で、いつになるかもわからない疾那が現れるときを待って、永遠に、延々と、トレーニングを繰り返していた。

だからこのときがどれだけ待ち遠しかったことだろうか。

いつになるかもわからない苦勞が報われるときがくるのがどれだけ嬉しかっただろうか。

自分の力をどれだけ使ってもいい戦闘なんてどれほど楽しい物か。紅李はそれを思い出しもう一度笑った。

「まあ、楽しませてくれ！」

紅李の足が地面を蹴りつけ飛ぶ。

疾那に向かつて一直線に。

それから疾那は逃げることはしなかった。

むしろ迎え撃つ構えに移行する。

ここで落椿について説明しておこう。

飛椿の威力はあまり高い方ではない。

所詮つなぎ、相手の隙を作る程度の能力でしかないのだ。と言ってもそれはあくまで『桜木流剣術』の括りの中だけでの話だ。普通の人間相手にならば十二分に相手取ることが出来る。

「ツつオオオオオ！」

「壺の太刀……落椿ッ！」

紅李の拳と疾那の剣が交わる。

拮抗する拳と剣。

二人の——ではなく一人の意地がぶつかりあう。虚無と暴力の意地が。

意地の張り合いはそれからすぐに終わった。

疾那の剣が紅李の拳を打ち破り、返しの剣で一撃を叩き込んだからだ。

剣技対拳技の勝負は剣技、つまり疾那の勝利で決着がついた。

「やっぱり強いね。流石私らのオリジナルだ」

「それは認めてくれたということでもいいのか？」

「ああ、相違ない。私は女だが二言はないぞ」

戦闘家だからな、と紅李は笑った。

「と言っわけで私、赤の色彩の力を授ける。一応もう一度説明しておくぞ」

と言って紅李は真面目な表情をした。

疾那もそれにつられて少し真面目な表情をする。

「赤の色彩がもたらす感情は怒りと闘志だ。これはまあ特に言うことはないな」

「ふむふむ。戦いに対するモチベーションが若干向上してると考えればいいのか」

「大体正解だな。次に色彩反応、シグナルパレット お前の能力『疾風刃来』の追加効果だ」

「空」の場合は剣を出し、剣に風を纏わせる能力だった。

恐らくはそれよりも便利な能力だと思われる。

まあ、それもなんの根拠もないのだが。

「宙に『赤』の文字を書くと追加効果で、剣に炎を纏わせること

が出来る。空の能力とだいぶ近いな」

「風の次は炎か。ふん、悪くない」

「随分と上から目線な物言いだな。まあいい、これで私から言うことは全てだ。それと私は少しの間あの難奈とか言う彩人の元に行くことにした。だから当分お前に会うことは出来ん。今のうちに聞きたいことはあるか？」

その言葉に疾那は少しの間考える。
聞き逃していることがないかを思い出す。

「あ」

「何かあったか？ さあ私に言うがいい」

その言葉を聞いてぶっきらぼうに、やや暴力的に疾那は聞いた。

「ここからの帰り方を教える」

「そんなことは後から教えるわ！」

疾那は紅李に全力で殴られた

赤の世界 十話 「罪人」

「はっ、夢か」

そんなことを言いながら疾那は意識を取り戻した。
一同啞然である。

現実世界の時間にして十分ほど意識を失っていた人間が突然、「はっ、夢か」などと言って起きたのだから当たり前だ。
言った本人である疾那は状況を理解してないようで自分を見る視線に首をかしげていた。

「どうしたんだみんな」

『いやいやお前がどうした』

全員から同時に突っ込まれた。

満身創痍のファルクとマルクからもである。

それでも疾那は何も気づかずに首をかしげるだけだった。

「お前って演技でもなく素でそんなだったのか……」

ファルクが頭を押さえて苦笑いしていた。

横にいたサムもハッハッハ！ とか大笑いしていた。

紅李と仲良くなれそうである。

「雛奈、あんたもこんなんが彼氏だと苦労しますね……」

しゃべり方が若干砕けている赤李。

疾那が意識を失っているうちに更に打ち解けあったのだろう。

「ば、ば、ば、ば、馬鹿じゃないの！？ 私と疾那が付き合ってるわけないでしょう！」

「え、そうなのか？ ……逆に」

「付き合っていないわよー！」

雛奈が顔を真っ赤にして否定していた。
何と云うかツンデレを地で行く感じだった。
キャラ付けも大変である。

騒がしい状況にちよつと嫌気がさしたのか疾那が立ち上がる。
そして手を体の前に出してこう言った。

「まあまあ落ち着けよ」

『逆になんでお前はそこまで落ち着いていられる！』

また総ツツコミだった。

疾那の反応は変わらない。

ファルクや雛奈は「こいつ鈍感……？」などと言い、赤季は「良いキャラしてるわね」とか若干感心し、マルクとサムに至っては笑っただけだった。

完全にギャグパートに入っていた。

そんな風にさりげなく手を出したときに疾那は気が付いた。

——ん、現実世界でも怪我が治ってる

さっきの疾那の精神世界で治っていたように疾那の怪我が全てとは言わずとも、両腕は使用に差し支えないくらいには回復していた。理由がわからない疾那は深くは考えず、紅李がサービスしてくれたのだらう、程度に考えていた。わからないものを深く考えない性格は相変わらず変わっていない。それはある種の安心感を全員に与えた。

それからまた十分くらい他愛のない会話をしてファルクが切り出した。

「まあこのままここで話す理由もないだらう。そろそろ上がるか」

もちろんそれに反対する者はおらず地下を出ることにした。

前から順に雛奈、赤季、ファルク、マルク、サム、疾那と言う隊列である。

階段を登りながら疾那はこの世界での戦いを振り返っていた。

そこで思い出したがそういえばルイスとか言う白衣の男がいたなあ、とか思っていた。

ファルクとの戦い。

左手がボロボロになってかなりの重傷だった。

そして紅李との戦い。

自分の精神世界で死にかけた。

一日でここまで戦ったのは初めてだったため疲れがかなり溜まっている。

そういえば赤のペンダントを雛奈に渡すべきなんだろうか。

紅李がなんとか言っていたがどうすればいいのだらう。

『ペンダントを渡さずとも雛奈に触ってもらえれば精神世界は行

き来出来るから安心しろ』

どこかからかそんな声がした。

それを気のせいだと流す疾那……。

数秒考えて、階段を数段登ってからやっぱりさっきのは紅李の声だったんだろうな、と理解しここを出たら雛奈に触っておこうと決めた。

また変なフラグを立てそうである。

そして先頭にいた雛奈が地上に着いた。

最後尾の疾那の目にも日の光が入ってきた。

少し目に余る光の量だったようで反射的に目をつぶっていた。

「やつと外だわー！ 一時間半くらい振りの太陽光！ うー光合成するう！」

「意味が解らないですね」

「とか言つて。うりうり」

「頬を擦り付けないでください！ セクハラです！」

なんとというか百合百合していた。

喧嘩が終わったとたんかなり仲良くなっている。

元々勘違いで始まった喧嘩だったため、当然と言えば当然なのだが。

と二人が仲良くしゃべっている隙にこっそり疾那は雛奈の手にタッチをした。

これで紅李の言うことが正しければ紅李は移動したはずだ。

いよいよ赤の世界の目的も果たして次の世界へ向かおう、と疾那は

意気込んでいた。

——しかし……次の世界への移動ってどうするんだ？

アートが迎えに来てくれるものだとはかり思っていたが、どうやって呼ぶのだろうか？

その辺の打ち合わせを全くせずに来たものだからどうしたらいいかがよくわからなかった。

まあ、適当なタイミングで来るだろうと疾那は判断する。

それが正しかったと気づくのはまたあとの話である。

「でもおかしいわね」

と唐突に雛奈が言った。

それに全員が視線を向ける。

「確か私が疾那に言われてこの辺の森を軽く燃やしたのよね？」

「ああ、そうだ。どうしたボケたか」

秘密基地の場所を探るために燃え広まらない草を燃やしたのだ。疾那も半分忘れていたがそれがどうしたというのだろうか？

「いやねこんなに広い範囲燃やしたっけなー、と思って」

言われて疾那は森を見渡す。

見てみると確かに燃えている範囲が軽く、などと言う距離ではなかった。

森がほとんどが燃やされていた。

周囲100メートル程の草木が完全に消滅していた。

焼野原、と言う言葉がここまで似合う状況も少ないだろう。

「おかしいわね……」

雛奈が顎に手を当てて考えていた。

疾那はもう考えることを放棄した。

多分勘違いだろう、そのくらいで済ませておいた方が気楽だ。

「あのお時間よろしいですか？　ちょっと聞きたいことがありますわ」

と、どこからか声が聞こえた。

柔らかなふんわりとしたお嬢様言葉だった。

声の方向を見てみるとそこには可憐な赤色のお下げ髪をした少女が立っていた。

ややたれ気味な目も相まってお嬢様にしか見えない。

「ん、何かしら？」

「桜木疾那、神楽坂雛奈、緋崎赤季の三人をご存じありませんでした？」

その言葉に雛奈は驚いた。

別に人探しをしているのは別に問題はない。

雛奈と赤季は昔は仲のいい幼馴染としてこの辺でも有名だったのだから。

だが問題は疾那だ。

疾那はこの世界の人間ではない。

それは当然の事実だ。

赤季たちでさえそれは知らない。

ならば、なぜこの少女が知っている……？

雛奈は少女から感じる底知れない恐怖におびえながらも答えを返した。

「私が神楽坂雛奈。そこにいる女の子が緋崎赤季。そのやる気なさそうなのが桜木疾那よ」

言い終えると同時に雛奈は唾をぐくりと飲み込んだ。
これが正しい行動だったのか。
ロードは出来ない。

「あら、そうでしたの。それは運が良かったですわ」
ぱあっと笑顔になる少女。

その柔らかな表情に全員が緊張感を解いた。

「じゃあ——溶けていただきますわあ」

「——ッ！ みんな横に飛んで！」

雛奈の言葉に従い反射的に横に飛んだ直後のことだった。
さっきまでいた場所が、いた地面が真っ赤に溶けた。

そこだけを見ればちっちゃなクレーターが作られたように見える。

襲撃された。

目の前の人畜無害そうなお嬢様だと思っていた少女に襲撃された。
解かれた緊張感が再び全員の体に纏われ、戦闘態勢をとらせた。

「嫌ですわね、そこまでガチガチになられると……興奮しますわあ」

ペロリと舌なめずりをする少女。

さっきまでのおしとやかな少女の面影はもはやない。
目も吊り上っていた。

「お前は……何者だ……？」

唯一まともに体を動かせた疾那は剣を構えながら少女に質問を投げかけた。

それに少女は怪しい笑いを浮かべながら答える。

「赤の罪人、真紅しぐれ 羽音はねのねですわ。あなたたちの敵ですよ。以後、お見知りおきを」

ぺこりと頭を下げる少女、羽音。

それを見ても疾那の心は少しも安らがなかった。

——罪人。

世界を壊そうとしている七人のうちの一人。

赤、つまり暴力の罪。

言われてみればこの変貌した後のドSそうな性格はぴったりと合っていた。

「わたくしもちょっと前に封印を解かれ、この世界に舞い降りたばかりですので、今日は戦うつもりはありませんわ。ちょっとした宣戦布告を二つほどしに来ただけですの」

宣戦布告。

敵側からそんなものを律儀にするとは思っていなかった疾那はやや驚いた。

それにしても……、封印を解かれたばかりと羽音は言った。

当たり前だが、それは封印されていたということだ。

同時に封印を解かれたということだ。

——少し前にあったことって言う……まさか？

いやいやそれはないだろ、と疾那は首を横に振りその考えを否定した。

ともかく目の前の敵が先だ。

「一つ目。これはわたくし達罪人全員の意味での宣戦布告ですわ。」

『この偽りの世界を溶解し、瓦解し、破壊し、創造し、斬殺し、滅殺し、殲滅してやるからな。精々足掻け、桜木疾那』ですって。以上わたくしたちのリーダーからのメッセージですわ」

「名指しで俺へのメッセージだと……？」

それはやっぱり疾那が空っぽの彩人だったからか、それとも何か別の意図があつての言葉だったかは定かではない。

世界を廻ろうとしているのは動かされている疾那だけなのだからどちらもあり得ないことではない。

「ちなみにこのメッセージは全員で賛同したものですので安心してくださいませ」

羽音は柔らかく笑った。

笑顔がひどく恐ろしかった。

ギャップで恐ろしさが何倍にも増してる気がする。

「まあそれはともかく二つ目ですわ。わたくしはそこにいる緋崎赤季さんを毎日きっちり三十分殺しにかかりますわ」

「は？」

疾那はその言葉の意味が解らず疾那は疑問だけを口にした。
三十分？ 殺しに？

言ってる言葉の意味がよくわからない。

困惑していた疾那とは違い雛奈はすぐに言葉の意図に気付いた。

「な、何言ってるのよあんた！ 私ならともかくなんで赤季を狙うの！？」

「そんなの簡単ですわ」

わかりきったことを聞かれてうんざりする先生のように笑う。
めんどくさそうに嘲笑する。

「その女がわたくしの代わりの存在だからですわ」

「ど、どういう意味よそれ！」

「答える義理はありませんわぁ。では今日のところはこの辺で失礼いたしますわ。ごきげんよう」

ニコツ、と笑いかけ羽音はどこかへと消えた。
一瞬で姿が見えなくなる。

赤い悪意が、紅い悪魔の姿が消えた。

それと同時に全身黒づくめの男、アートが姿を現す。いつも通りに不敵な笑顔を浮かべて状況がよくわからないようであつていた。

「ええと、とりあえずどういう状況です？」

「罪人に襲われた」

「ええっ！？ それはまずいじゃないですか！ まだいるんですか！？」

「もういない」

疾那にしては珍しく呆れた口調で言葉を返した。

アートもそれには流石に苦笑いをしていた。

赤季とファルクら三人は謎の襲撃者の攻撃宣言に体を震わせるだけだった。

「疾那、ごめんけど私あんたにはついていけないわ」

「……まあ仕方ないことだ。羽音を倒したら、そのときに合流しよう」

「絶対に赤季たちを守って見せるから」

疾那と雛奈は笑顔で手を組んだ。

その後疾那はファルク、サム、マルクとも握手をした。

この世界でかわった数少ない人間だ。

一人だけ忘れていたがこの場合は仕方ない。

これで赤の世界の話は終わり。

闘い続киだった赤の世界は終わり、次の世界へと疾那は旅立つ。
次の世界は何色か。

その答えは誰が知っているだろうか。

次の色彩に続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7559x/>

失われる世界～ロストパレット～

2011年11月8日09時00分発行